

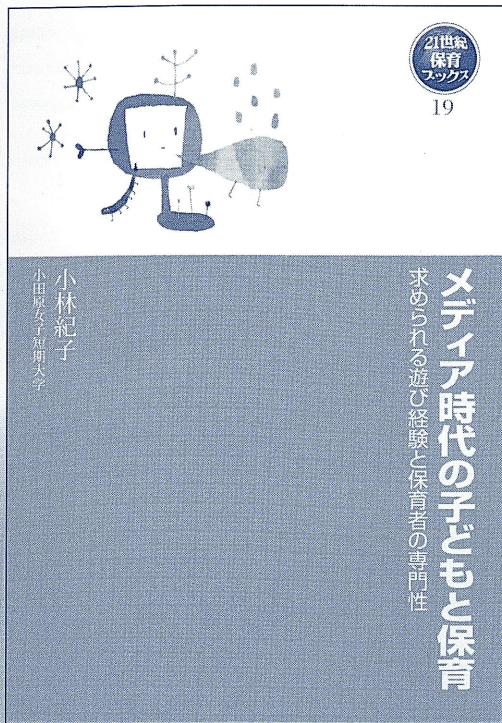


幼児の 教育

家庭・保育所・幼稚園

好 評 発 売 中 !

メディア時代の子どもに
生身の身体を通した
遊び経験の復権を願い、
「求められる遊び経験」とは何かを、
「現実と虚構を往還することの意義」などの
側面から論じていく。



21世紀保育ブックス19

メディア時代の子どもと保育

求められる遊び経験と保育者の専門性

小林紀子著

●目次から

- 第1章 メディア時代の子ども
- 第2章 求められる遊び経験
- 第3章 求められる保育者の専門性
- 第4章 保育者として遊びの読み取りを！
～遊び研究の試み～
- 終章 メディア時代に生の実感を！

19×13cm／160頁
定価1,260円(税込)

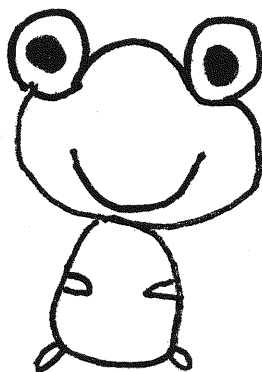
キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第105巻 第7号

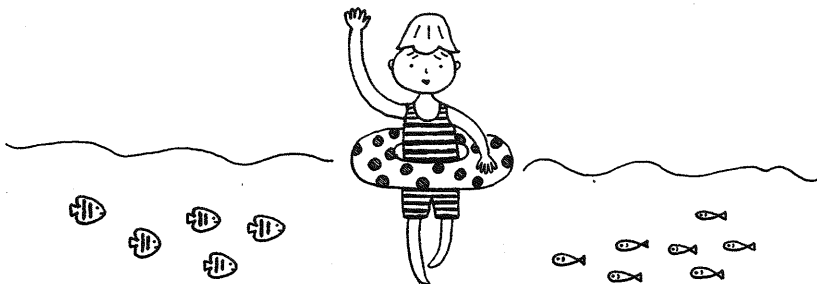


幼児の教育 目次

— 第一〇五卷 第七号 —

© 2006
日本幼稚園協会

卷頭言 子どもの意見に耳を傾ける世の中を創ろう……………安部富士男……………(4)	天国からの種……………津守 眞……………(8)
父の叱り方……………土屋 賢二……………(14)	子どもの脳は今？(1)……………坂元 章……………(19)
—ゲーム脳について—……………恒川 直樹……………(26)	「子どもの見る眼」から「子どもを見る眼」へ……………(26)



ゆつくり星を見ませんか？

—七夕と星空— …………… 田中 千尋 …… (34)

児童学からの出発(3)

現代おもちゃと子ども世界の文法 その二 …………… 森下みさ子 …… (40)

カリフォルニア滞在記(三)

—忘れ得ぬ人々— …… 岩立 京子 …… (49)

新たな出発の年を振り返って …………… 松永 聖子 …… (58)

表紙絵／さのまきこ

扉題字／津守 眞

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／さのまきこ

編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子



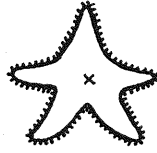


巻頭言

子どもの意見に

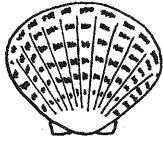
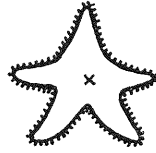
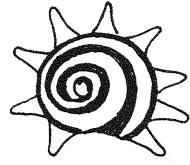
耳を傾ける世の中を創ろう

安部 富士男



子どもに学び、子どもに励まされて生きる

弁当を小脇に園庭に出ると「どこでお弁当、食べるの」と、まりえが寄ってきました。「決めてないよ」「よかった。けやき組で食べよう」と手を引かれて部屋に入ると、言葉のでていない貴紀が手招きして自分の前の席を指しています。「ありがとう。貴紀君と一緒に弁当食べられて嬉しい」と席につきました。貴紀はかわいいえくぼを笑顔に浮かべ、両手を小鳥が羽ばたくように振ってから母親手作りのお弁当をおいしそうに食べ始めました。私が弁当を食べながら「貴紀君の笑顔、かわいい」と独り言をつぶやくと、歩が、私と貴紀の顔を交互に見つめてから私の耳に口を寄せ、小さな声で「貴紀君はいつもかわいい顔で笑っているけど、笑っていても悲しいことがあ

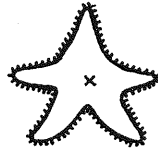
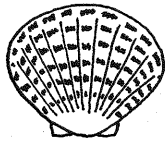


るんだよ」と話しました。歩のことは先週の『園だより』に綴った私の文を思い出していました。

チャボ係の子どもたちが野菜を微塵に刻んで貴紀の餌箱に入れてあげました。貴紀はチャボに餌をあげるのが大好きです。餌箱を持って歩き出した途端、つまずいて餌がこぼれました。貴紀は半身に軽い麻痺が残っています。係の子どもたちは「また、こぼしちゃった」などと言いながらも餌を拾って箱にいいいに入れていきます。友だちの様子を貴紀は笑顔で見つめていました。この笑顔に貴紀の感謝の想いがこめられている、周りの子どもたちも言葉のでない貴紀の笑みに「ありがとう」という想いを汲み取っていると『園だより』に綴りました。しかし、私は、貴紀は笑っていても悲しいことがあるんだという歩のことに私の人間理解の浅さを実感しました。子どもたちに学びながら、子どもも理解・人間理解を深めていこうと念じました。この世に生を受けてまだ五年余の歩が「笑っていても悲しいことがある」という感情の機微をチャボの世話をしながら仲間との交わりを深め、学んでいることを知って感動しました。

3Cを紡ぐ環境の中で総合活動を豊かに

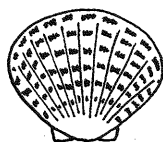
二十世紀の教育は読書算中心に進められてきましたが、二十一世紀の教育は3Cを織りなす総合活動を土台に創られるといわれています。3Cとは、Care, Concern, Connectionの最初の文字をとった略称です。ウサギに心配り(Care)する、ウサギに



関心 (Concern) を寄せ、ウサギの世話をする仲間やその仕事、ウサギの登場する絵本や歌へと関心が拡がり、ウサギやウサギの世話をする仲間との関係 (Connection) が深まる、3Cが紡ぎ合う総合活動が教師を仲立ちに自然に生まれるように環境を構成する必要があります。そこで、子どもたちは、自主的な活動を創造し、見つめる力を豊かにし、協同的学びを体験していきます。

私たちは、子どもたちの遊び・仕事への取組みを目の当たりにし、親たちと保育や子育てを話し合うことを大切にしています。数人の母親が入園に備えての保育見学にきました。「あんなに高い木に登っていますが危なくないですか」「泥んこになって遊んでいてかわいけれど、お勉強は何時するんですか」などと、矢継ぎ早に私に質問を投げかけていました。そこに、雅人がヒヨコを掌に乗せてやってきました。「不思議。昨日までヒヨコだったのに今日はチャボになっている」と、トサカを指しています。

トサカの朱がやや濃くなっています。その時、雅人の腕に黒い小さな虫が止まって嘸みつきました。雅人が「痛い」と顔をしかめると、ヒヨコがその虫をついばんで食べてくれました。「ヒヨコ、優しい。僕が痛いって言ったら虫を捕ってくれた。こんなに口が尖っているのにそっと捕ってくれた。皆に教えてくる」と駆け出しました。母親たちの視線が雅人を追ってチャボ小屋に向いています。小屋の前で野菜を刻んでいる子、小屋を掃いている子、水を取り替えている子、母鶏が卵を温めている箱を覗いてヒヨコの鳴き声が聞こえないか待ち構えている子がいます。私は親たちに「教師に



指示されたからというのではなく、ヒヨコがかわいいから関心を寄せてかわいいがる、チャボの登場する絵本を読む、チャボ係の仕事を通して仲間との関係が確かなものになっていく、その体験を描いたり物語にしています。幼児は実体験を通して学んでいます。保育室にチャボの絵が貼ってあるから見てください」と話しました。

子どもの意見表明権を軸に子育て、保育・教育を考える

去年九月、国連は「乳幼児期の子どもの権利」という一般所見を採択しました。所見作成にかかわった国連ドイッ代表クレップマン氏は、十月十七日の横浜講演の中で「子どもの意見に学ぶことなしに子どもの権利を保障する『子育て、保育・教育』はできない。赤ちゃんだつて自らの意見をもっている。笑ったり泣いたり、手足を動かしたり、時には下痢をして自分の意見を表明している。泣いている時も、甘えたい時、空腹の時、おしめが濡れている時、おなかが痛む時、眠い時では、泣き方が違う。大人は、泣き方にひそむ意見に学んで赤ちゃんの世話をする。これは一例、どんな場合でも、子どもの意見に学ぶことなしに『子育て、保育・教育』の質を高めることはできない。子どもの権利を守る実践は、子どもの意見表明を大切にする中で実現する」と話されました。私は、この講演に耳を傾け、子ども中心の社会を創る大人の取組みは人間の尊厳を大切にする社会づくりに連なる、子どもは地球の宝と考えていました。

(安部幼稚園)

天国からの種

津守 眞

赤ん坊は一人ひとり良い種をたずさえて天国から降りてくる。

これはたとえである。私は、赤ん坊から幼児へと成長する姿を見ながら、このたとえをしばしば考えた。

真実にふれた「たとえ」は行為の指針ともなる。

良い種

ここに書くのは、私の保育のひとつまでである。

三歳九か月になったその子は、その日、畳の部屋で

ひとりで何かをしていた。私は何も言わないで見ていると、その子は障子の破れ穴に苦心して紐を差し込み、反対側から出そうと繰り返し試みていた。結局紐はすっぽ抜けて終わった。アイデアを思い付くこと、それを実現しようと試みることは子どもに与えられた天国からの種ではないだろうか。

そばに、金魚の絵の付いたガラスの風鈴が吊るしてあった。その子が手を触れたら落ちて割れた。私はその掃除に追われた。その間に、その子はシャボン玉を

作る洗剤を出してくれと言ひ、一緒に用意しているうち、大きな盥あらいを洗面所に出して欲しがった。一緒にシャボン玉を作る。私も床に寝そべって、シャボン玉をしながらその子と同じように声を出すと、うれしくてゲラゲラ笑った。シャボン玉と一緒に楽しんだ。子どもと一緒にいると、そこが天国のように思えてくる。

私は子どもが自分でし始めたことを大切にす。傍らで経過を見る。それを生かして私も何かをする。ガラスは割れたが、穏やかで楽しい半日だった。風鈴が割れたことが次の活動へと導き、この日の保育を助けてくれた。

天国の良い種を育てるのには、子どもが始めたことをまずだいにし、肯定し、それを共に味わい、一緒に生きる。それが育つ場である。

朝、その子は父と一緒に、玄関に飛び込んできた。大きな袋を持って、ネコが入っていると行って、ペンギンの縫いぐるみの大きいのが顔を出していた。ニコ

ニコして体中で笑っていた。箱を出してあげると、皆が乗れる舟を作ると言って、幾つかの縫いぐるみを入れたり出したり、熱心に遊んでいた。そのうちにティツシユの紙をためらいなく次々に出して、氷の海の雪をかきわけて、床全体が氷の海になる。ティツシユの雪と氷である。想像力によって、ただのティツシユが何にでもなる。もつたないとも思うが、この想像力を駆使するところを見ると、それに値する。海と舟、ピングー、ペンギン、浮き輪のイメージで、昼食まで続いた。ババちゃん（祖母）が主として遊び相手、私はそばにいて何かと手伝う用事がある。祖母と一緒に太陽のあたる縁側で遊んでいる光景は天国である。

悪

赤ん坊は天国からの良い種をたずさえて降りてくるというならば、悪もたずさえてくるのではないかと夜中に考えたが、それは抽象的、人為的な考えである。

こうして遊ぶ最中に身を置いていると、そこはどうしても天国である。そのうちに、子どもはいやおうなしに社会の悪にさらされるだろう。昼食が済んだらピデオを見ようかと言っていたが、私が庭の雑草を取り始めたら、自分から庭に裸足で降りてきた。肥料をやったり、バッタをとって虫かごに入れたり、私と一緒に働いていた。大きなミミズを見つけて手の上にのせた。穴を掘っていたが、手で掘っていて、指を怪我して、イタイと泣いた。小さい手袋を出してあげた。

おやつの後、ババちゃんと私とその子の三人で家の前の公園に行った。砂場の入り口をしめて、他の子を入れたくない。これは子どもの中にある悪なのか？

そうではないだろう。ある時期、子どもは親しい人と二人だけの世界をつくりたい、他の子を内に入れない、というのには、誰にでもある。それを天国とするかどうかはそこにいる大人の方にかかっている。よその女の子が鉄棒をしに来た。私共は帰りかけていたが、子どもは興味一杯で、鉄棒にぶら下がっているう

ちに、私共も一緒に砂場で遊び始めた。

公園の時計の長針が「5」なのを見て、「5」は何時？」と聞く。「次は？」と聞き、10時は夜だと言うと、「夜はどうしてくるのかなあ」「車からとびだすのかなあ」「星からとびだしてくるのかな。月からくるのかな。テーブルの下から、椅子の下から、積み木の下から？ 足の裏から？」「あ、そうだ、夜は夜の国から、朝は朝の国から」。

私は、こんなことを言う子がどうしてそばにいるのだろうと不思議に思い、幸せに思った。

砂糖の袋から「おさとうがとびだしてくる」と言っていてそれを上等なカップに入れた。

私は子どもがし始めるところから天国が飛び出してくると思った。幼児はどうしてこんなことが言えるの



だろう。

そのはじまり

数年前新しい赤ん坊が家に来たとき、新生児は天国から直接降ってきた人だと私は思った。やがて死ぬときは、人はひとりずつ直接天に昇る。生きている人間はその中間だ。

赤ん坊はじきに、おっぱいが欲しいと言って泣き、うんちをし、眠り、またおっぱい。うまくおならが出ないといってイライラし、うまくいったと喜び、人間の生活が始まる。生後八か月のとき、嵐の後、西の空に夕日が射した。赤ん坊は一筋の太陽の光を見て声をあげた。赤ん坊の感動がそこにあった。私も思わずウワーと声を出し、「キレイ」と言った。赤ん坊はニコリ笑った。私共にも一瞬ハッとする感動のときだった。大人と一緒に感動するときの子どもの喜び（本誌一〇四巻第一号）。大人が共感することによって、子どもの感動する心が育ってゆくことを私共は知った。

赤ん坊は天国から良い種をたずさえて地上に降りてくることが疑い得なかった。

一歳半になったとき、大きな赤い自動車の広告を見て、ウワーと声を上げた。そして、円筒形の積み木を三個並べ、立方体の積み木をその上に三個のせて感動を表現した。感動は行為として表現される。そういう話は限らない。

真実なものに感動する種はひき続いている。

子どもが始めたことに天国の種があると信じ、子どものすることにその子どもなりの理由があると信じて、私は保育をしてきた。そういう考えは子どもをわがままにするとしばしば言われた。だが、わがままにならないようにと考えるのでなく、違った感受性をもった子どもたちと地上でどう付き合うかを考えるのが保育ではないか。子どもが三歳になった頃から、地上には悪の種が一杯あるから、三歳を過ぎれば、悪の社会に対する備えをしなければならないのではないかと、私は時々考えた。果たしてそうなのだろうか。

毒麦のたとえ

種蒔きのたとえに続いて、福音書には次のように記される。

「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行つた。——僕（しもべ）たちが、『では行つて抜き集めておきましょうか』と言うと、主人は言つた。『いや、毒麦を集める時、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れるまで、両方とも育つままにしておきなさい。』と。」

忍耐をもつて、神様がどうされるかを見なさいという事ではないか。

この日の朝、私共の保育はそこから始まつた。私が居間の天井の電球をかかっていると、その子もやりがたがたした。

新しい電池を二本見つけた。電池には毒の水が入っているから、古い電池はビニール袋に入れて捨てるこ

とを話し、社会には悪いものもあることを話した。その子は前回に作りかけの水風船に気が付いた。その子はお祭りみたいに水風船を紐にぶら下げたいと言つた。短い紐を長くするには二本の紐を結べばいいと私は考えたが、その子は違うことを考えていたらしく、これじゃだめ、あれじゃだめと言つていたが、私にもよくわからないままに結んだら、端が余つた。その子は「ほら、いいでしょ、これはお飾りよ」と言い、それを飾りにした。思つていなかった素敵な水風船の列ができた。大人は自分の結論を先に出して一方的にやつてしまいがちなことを私は恥じた。もつと柔軟で大きな心にならなければならないのだろうか。

人間の中には欲という悪い種がある。果てしなく誰の中にもある。悪を大きく膨らませるのは大人である。しかし欲がすべて悪いわけではない。それは同時にどこまでも追求する自我の強さにもつながる。それがなかつたら、良いアイデアをやり遂げる力も生まれないし、世の中の發明や発見も生まれないだろう。自

分を捨てても他者に尽くす優しさも育たないかもしれない。子どもがし始めたことを信頼するのは教育の出発点ではないか。たとえ悪の種であっても、人間にはそれを訂正して良い方に向けていく力があることを私は信頼したい。また、大人には良い種を育てる力があることを信頼したい。

では、子どもの成長の過程で大人の基準からはずれる行動をどう見るか。常識からはずれることの中にも良い種があるだろう。隠されている微かに小さな良いものを見いだし、愛をもつてかかわるのが教育だと思う。子どもがそのとき幸せであることが第一だが、子どもの未来を望み見、子どもが参加する社会を望み見るのが教育である。毒麦をもそのままにしておけというのは、それすらもよく生かされる道があることを示唆している。

私の学校のひとりの母親が、六年生になった子どもの卒業間際にパウロの言葉を引いて私に話してくれた。

「わたしたちは知っているのです。苦難（トラブル）は忍耐を、忍耐は練達（経験）を、練達は希望を生むということ、希望はわたしたちを欺くことはありません」。

大人の期待する良い子でありつづける子どもはいない。乳児のとき食卓をかきまわして大人の生活に侵入し始めたときから、幼稚園、保育園でのしきたりやきまりに馴染まない行動の数々、子どもと大人との間のトラブルは絶えない。その間で苦勞しながら、さまざまな子どもの未来を開いていくのが保育である。保育することは忍耐を養われることである。その経験の上に、どんなことが起こっても崩れることのない希望が生まれる。その母親は、そのことを私に告げたいと思つて、寒風の中で話してくれたのだった。

それとは別に、社会には本当に悪い種もある。六十年前にあんなにも決意して歩き始めた理想に向かう道を捨てて、別の方向に走ろうとする現代の無節操と無知である。

（保育研究者）

父の叱り方

土屋 賢二

どんなものでも叱られるとは限らない。叱られるのは、人間や犬ぐらいで、カメや金魚が叱られることはない。このことからわかるように、叱られるのは、自然のまま放っておくと手がつけられなくなる動物だけである。

わたしは子どものころ、父によく叱られていた。このことから、カメや金魚とは違うタイプだと思われることがわかる。母は一度も叱らなかつたから、もしかしたら違う見方をしていたかもしれない。妻はわ

たしをよく叱るから、わたしを金魚レベルだとは思っていないのだろうが、金魚以上だと思っているのか、金魚以下だと思っているのかは明らかでない。

父はわたしをよく叱つたが、愛情も惜しみなく注いでくれた。学校には毎朝自転車に乗せていってくれたし、病気になるまで徹夜で看病してくれた。近所の子がわたしをいじめたりすると、父はその子に仕返しをしてくれたし、わたしが幼稚園で、なかなかブランコに乗れないでいると、乗っている子をどかせて乗せてく

れた。教育学の立場からいうと、こういう愛情の注ぎ方は間違っているのかもしれないが、父がわたしの味方だということはよくわかった。

父の叱り方も、教育学の立場からすると間違っていないかもしれない。

1

よく、叱るときは怒ってはいけないといわれるが、父が叱るときは半端ではなかった。ふだん明るくて陽性の父が、顔色を変え、ものすごい剣幕で怒鳴りながらひっぱたくところを見ると、どう考えても激怒しているとは思えなかった。叱られるたびに、殺されるのではないかと思っただけだ。

叱られそうだと思ったときは、よく逃げ回ったが、もちろん逃げ切れるはずがない。トイレに逃げ込んで鍵をかけてもドアを破って引きずり出された。逃げる時、よけいに叱られるし、つかまって泣くと「泣くな」と言っただけだということはわかってい

たが、逃げないではいられなかったし、泣かずにはいられなかった。叱られることのない金魚や猫がうらやましかった。

だからわたしには、ワシントンが、桜の木を切ったことを、叱られるのを覚悟の上で告白したというエピソードがとても信じられなかった。叱られるくらいなら何でもできるはずだ。嘘をついてその場がしのげるなら嘘でも何でもついた方がいいとは思えなかった。むしろ正直に打ち明けたら、「善良ヅラして生意気なやつだ」と言っただけに叱られていたような気がする。ワシントンがわたしの家に生まれていたら、正直に告白したかどうか疑わしいと思う。

わたしは叱られるのが怖かったため、叱られるか嘘をつくかという選択を迫られれば、つねに嘘を選ぶようになった。さぞ嘘をつくのが上手になっただろうと思われるかもしれないが、嘘がバレるのが怖くて動揺するため、嘘をつくとすぐに見破られてしまい、おかげで、結局わたしは詐欺師にはならず、たんなる嘘つ

きになるだけですんだ。

いまでも、ドラマで親が冷静に叱っているのを見ると、うらやましいと思う。ああいうふうには叱られていたら、もつと悪いことをすることができたのと思う。

こんこんと説教するタイプの親もいるらしいが、わたしの親がそういうタイプでなくてよかつたような気もする。幼稚園のころ、わたしの足が細すぎるといつて風呂で父にひっぱたかれたことがあつたが、このときも問答無用だつた。こういうとき、説教するタイプの親なら、「お前なあ、人間として恥ずかしいことなんだ。足が細いということは」などと静かにさすのかもしれないが、そう説教されたら、怖がるわけにもいかず、わかつたふりをする以外にどうしたらいいのか困っていただろう。どんな理屈をつけても、どうせわかるはずがないのだ。

本気で殴られると、悪いことをしたということが百の理屈よりもはつきり実感できた。「悪いこと」とは、

叱られるようなことだ、と定義していたのだ。叱られるのがあまりにも怖かつたので、叱られないですむなら何でも我慢できると思つた。ただ、問題は、どうすれば叱られないですむかということだつた。

2

よく、気まぐれで叱つてはいけないといわれる。実際、原則を決めて叱らないと、子どもも犬も混乱するばかりで何も学習できない。犬のことはよく知らないが（犬もわたしのことを知らない）、規則に従つて行動する動物である。犬をしつけると、決まつた時間になると散歩を催促し、その通りにしないと怒るようになる。犬は規則に従う代わりに、人間にも規則に従うことを要求するのだ。

しかし、父はわたしを犬とは見ていなかった。どういう原則で叱っているのか、最後までわからなかつた。たとえば、父も一緒になつてふざけ合っているかと思えば、次の日には、ふざけ合おうとすると怒り、

わたしが将棋などで遊んでいるのを機嫌よく見ていたかと思うと、一時間後には「そんなくだらないことをするな」と言っただけで叱ったから、気まぐれで叱っているとしたか思えなかった。

父は「ゴミを道ばたに捨てるな」とか「他人に迷惑をかけるな」といった、ふつうの親が子どもに教えることがらについては、まったく無関心で、そういうことで叱られたことは一度もない。皮肉なことに、大人になってみると、「他人に迷惑をかけるな」と教えられて育った連中が、「他人に迷惑をかけるな」と教えられたことのないわたしに一方的に迷惑をかけているのだから、教育はわからないものである。

一貫して叱られたのは、「お前は根性がない」「競争心がない」といったことだけで、それ以外のことにについては見当がつかなかった。

たとえば、小学校の入学式で先生が話しているのをちゃんと聞いていなかったという理由でひっぱたかれると、わたしは社会の規則に従わなくてはいけないの

かと思ったが、町内の祭りで山車を引いていて帰りが遅くなったときは、団休行動に従ったという理由で叱られると、社会規則に従順に従う人間になってはいけないのかと思った。

いま考えると、父の態度は理解できるような気がする。人間というものは、一貫性のない動物である。意義深く思えたことが、次の日にはくだらないように思えたりするものだ。子どもにかける期待も、矛盾をはらんでいる。勉強してほしいと思いつつも、ガリ勉タイプにはなつてほしくないと思いつつ、社会の規則に従ってもらいたいと願いつつ、一方では規則にとらわれない自由な人間になつてくれることを期待する。一貫性のある人間というものをわたしは見たことがないが、父も、わたしに似て一貫性のない人間だっ



たから、子どもに一貫した態度をとれるわけがない。

ただ、当時のわたしは、たとえどんな原則で叱られているのがわかったとしても、どうすればいいのかわかるわけではなかった。たとえば、成績が悪いという理由で叱られたが、わたしは、漠然と、何かを改めなくてはならないんだろうなとは思ったが、当時は、勉強は家でするものではないと思っていたから、予習や復習の概念をもっておらず、宿題は一度もしたことがなかった。だからどうすれば成績が上がるのか、見当もつかなかった。父も具体的にどうしろとは指示しなかった。実際、父にとっては万事、結果がすべてで、努力したかどうかは関係がなかった。

競争心をもって、という点については一貫していたが、それでも学校では「人と争ってはいけない」と教えられたから、混乱するばかりだった。さいわい、競争心をもつにはどうすればいいのかわからなかった。

足が細いという点にいたっては、どうすればいいのか、見当もつかなかった。どんなものを食べれば太く

なるのかもわからなかった。親もたくさん食べればいいのかという程度の知識しかもっていなかった。

実際に社会に出てみると、予測通りにものごとが進むことはほとんどないことがわかった。どんなに気をつけて行動しても、たいてい予想もなかった問題を引き起こしてしまう。個人でも人類全体でも、問題を引き起こさないで行動するにはどうすればいいのか、子どものころのわたしと同じく、だれも知らない。

わたしはどうすれば叱られることなく過ごせるのか、わからないまま成長した。どんなことをしているもいつ雷が落ちるかかわからないと思っているから、慎重な人間になってもおかしくなかったが、軽率で落ち着きのない人間になった。どこかに落ち度があるのではないかと自信がもてず、すぐに反省する人間になった。原則通りに叱られて育った妻は、原則でしかものを考えない無反省な人間になり、いまではわたしを無原則に叱っている。

(お茶の水女子大学)

子どもたちの脳は今？ (1)

— ゲーム脳について —

〈お茶の水女子大学公開講座「子育てのためのリスク管理論」から〉

坂元 章

ゲーム脳というのはかなり有名な言葉になっていきますので、皆さんご存知なのではないかなと思います。ゲームをやっていると脳に悪影響がある、ゲームが脳を破壊するといわれているんですね。そのようにゲームによって機能不全を起している脳をゲーム脳といえます。ゲームによって機能不全を起している脳は子どもを暴力的にするとか、人との付き合い方を下手にして社会的に不適応を引き起こすとか、高度な思考や情報処理ができなくなると

いったことが挙げられているのですが、これらはすべて心理学が研究してきたことなんです。ですから、そちらの成果がどうかということがゲーム脳の問題を評価することにもなるのです。

一. ゲームは子どもに

どういふ影響を与えるか？

ジャーナリズムでは、直観的にこういうことが危ないだろうという議論がなされています。これはア

ジャーナリズムでは、直観的にこういふことが危ないだろうという議論がなされています。これはア



カデミックな世界でもいえることで、特に他の分野の方が今まで実証研究を捕捉しきれなかったんだと思います。直観も大事ですけど、基本的には実証研究を重視してやっていくことが大切です。

今までの研究の成果をみてみると、単純にゲームが悪いとかいいとかいえるわけではなくて、非常に複雑です。いろいろな側面によって影響の出方が違う。たとえば、暴力に対する影響、ひきこもりとか社会的不適応に対する影響、学力とか知能といった知的側面に対する影響、体力とか視力とかの身体面に対する影響など、それぞれの側面によって影響の出方が違う。それから、メディアの違いですね。たとえばゲーム、インターネット、携帯電話といったものによっても影響が違います。それからコンテンツですね。単にテレビゲームをやるから暴力的にな

るとか学力が下がるとかいうことではなくて、そのテレビゲームのソフトの内容がすごく大きく影響を左右します。

二. ゲームの影響について

どのように研究がされているか？

代表的な研究方法として、調査・パネル研究・実験室実験という三通りの方法があります。調査というのはアンケート調査をイメージしていただければいいです。暴力性を調べるアンケート項目というものがもともとあって、テレビゲームをやっている子どもほど本当にそういう暴力性が高いのかということとを調べていきます。この調査は国が大規模にやりたりして時々新聞にも出ていますが、これには大変大きな問題があります、因果関係と相関関係とこのを理解しておく必要があります。

因果関係というのは、二つの一方が原因となってもう一方が結果となる関係性をいいますが、こうい

う影響問題をやるときに必要なのはあくまでこの因果関係なんです。すなわち、ゲームが原因となって暴力性が結果になるのかどうか、これを明らかにしなければ影響問題は議論できないのです。もう一方の相関関係ですが、これは単に連動する関係のこと、どちらが原因でどちらが結果かということはわからないわけで、調査で明らかになるのは、この相関関係だけなのです。

ゲームをやっている子どもほど暴力的になるとい
うのは、相関関係であって因果関係ではないんです。なぜかという、そういう相関関係があっても因果関係としては何通りも想定できるわけですね。

たとえば、ゲームをしていることが原因となって、結果的に暴力的になるという因果関係は、確かにゲームをやっている子どもほど暴力的になるとい相関関係の中で成立します。逆に、もともと暴力的な子どもがゲームをするようになる場合、暴力が原因でテレビゲームをするほうが結果ですね。それにもか

かわらず、ゲームをやっている子どもほど暴力的になるとい相関関係が生じるんです。もう一つの要素、たとえば性別というのがあります。男性のほうが女性よりもテレビゲームをよくするんです。だから、男性に生まれたことはテレビゲームをよくする、という因果関係があります。それから、男性に生まれたことは人間を暴力的にするんです。ですから、テレビゲームが暴力性を引き起こさなくてもテレビゲームをやっているのは男性が多くて、その男性は暴力的なんです。それから、テレビゲームと暴力性の相関関係が生じます。これはテレビゲームが暴力性を生み出すという因果関係ではないんです。このように、いくら相関関係がわかってても因果関係はわからないんです。調査研究では影響問題ははかれません。

そういう問題を克服するために、パネル研究があります。これは調査を同じ対象に対してもう一回以上やることです。縦断研究、フォローアップスタディーとかいろいろな呼び名があります。なぜこれ

が因果関係をはかれるかという原理をここでお話しすることはできないんですけれども、要するに複数回行いますと時間差ができます。後に起こったものが前に起こったもの原因となることはない。そういう原理を利用して、逆方向の説明を排除するんです。これは完全とはいきませんが、因果関係があると特定します。

もう一つは、実験室実験というのがあります。これは、実験室に被験者を呼んでやる研究ですけども、実験協力者をランダムに半々に分けまして、一方のグループの方にはゲームをやっていたら、もう一方のグループの方には、同じ時間、中立的な映画を見るなどして時間をつぶしてもらいます。「赤毛のアン」などですね。その後で、この二つのグループのどちらの暴力性が高いかを調べるんですね。これは完全に因果関係が特定できます。ただ、実験室に呼び出していますので、いまひとつリアリティーがないわけです。ここでわかったことが、現

実的なテレビゲームの影響をどれだけ反映しているかはわからない。ですから、パネル研究と実験室実験の両面から議論する必要があります。

先ほどの調査研究では因果関係がわからないという話ですが、これは専門家でも怪しかったりするんですね。二〇〇四年三月十日の毎日新聞ですけど、日本小児科学会が、二歳以下の子どもにはテレビやビデオを見せないようにしましょうという勧告を出したことが載っています。この勧告自体は、一つの考え方で悪いとはいえないと思います。ただ、千九百人の調査をしたら、テレビを長時間見ている子どもの方がそうでない子どもに比べて言葉の遅れが二倍であったという調査結果があったので、その結果、見せてはいけませんという勧告が出しているわけです。これは大変影響力をもった勧告になっていますね。ところがこれは、典型的な調査です。だから実のところ因果関係はわからないんです。テレビを見ているから言葉の発達が遅れたのか、もと

もと言葉の発達が遅い子が好んでテレビを見ているのか、その辺りがわからないんです。これだけで判断することは、アカデミックな観点からいうと誤りです。

三．暴力シーンとはどんなもの？

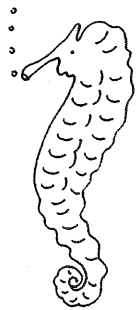
悪影響はあるのか？

先ほど、脳の研究は心理学で多く行われていると言いましたが、それでも研究の数は少なく、あいまいな部分が多いのです。研究として多いのはテレビの研究です。テレビはテレビゲームよりも何十年も前からあるので研究の蓄積があり、テレビの暴力シーンが悪影響を与えるかということについては従来から論争がありました。そこには学習説というのとカタルシス説というのがあります。

学習説というのは、テレビの暴力シーンが暴力性を高めることを肯定する説として、暴力が良いものであるとか、問題解決の手段として有効であるとい

う価値観が学ばれてしまう。それが一番重要なことだといっています。これを実証している研究は多くみられます。たとえば、ウルトラマンが出てきて怪獣を倒して「ウルトラマンありがとう！ ばんざーい」となるわけですが、これは暴力が問題解決の手段として有効だといっているわけです。現実場面でどうかというと、暴力は最終手段で、その前に話し合ってみたり、なんで相手が暴れているのかその背景を考えようとする。ところが、ウルトラマンの世界ではいきなり暴力なんです。現実とかけ離れているわけです。

これと対立する説として、カタルシス説というのがあります。我々は暴力を振りたいという欲求をもっているけれども、現実的にはできない。それが欲求不満となつてたまつていく。そこでテレビの暴力シーンを見ることで解消されるので、かえつて暴力がおさまる。そういう議論です。ところが研究が進んで決着がついて、今は圧倒的に学習説です。カ



タルシスを支持する研究もありましたけど、方法的な問題を指摘されました。また、カタルシスはあってもあくまでも短期的なんですね。価値観の学習というのは長期的に続くわけで、長くなってくると悪影響のほうが強くなる。結局、現実的な問題は長期的なものですから学習説のほうが重視されています。

ですから、今テレビの暴力シーンの悪影響があるかないかといえば、ある。ただ、それはあくまで要因の一つであって、暴力シーンを見ただけで犯罪が起きるとかいうことはまったくないわけです。日本では何千万人の人が暴力シーンを見るわけですから、殺人者もつと大勢いてもおかしくないわけですが、そんなことはありません。ですから、犯罪につながるっていくのは生まれながらのものとか生育上のものとか友達の影響とかそのときのストレスと

かいろいろな要素が絡んでいる。テレビの暴力シーンはそういう要素の一つになるかどうかということの研究されているのです。

価値観の学習というのは、特に暴力が肯定的に描かれた場合に起きやすいのです。ですから暴力を正當化して、たとえば親の敵を暴力で討つとかいう場合に悪影響が強まる。もともと暴力的な傾向が強い人、同一化の傾向が強い人は影響されやすいです。それから、イライラしているとき、影響は強くなります。逆に、周りの仲間が暴力に嫌悪感を示したり、テレビで描かれていることが現実的でないことや、何が描かれていないかを教えてあげると影響力が下がる。たとえば、怪獣を倒して万歳となりますが、怪獣には子どもがいたかもしれない、その子どもは親が死んですごく悲しい。でも、テレビはそこまで映さないわけですね。単にテレビに没入するんじゃないくて、それを論評して鑑賞していくような見方を育てる。こういうことをすると影響力が下がる

と考えられます。

テレビゲームについての研究は少ないですが、最近では、研究者もテレビゲームの暴力シーンも悪影響を及ぼすというふうに考えているといえるところは思います。その理由としては、テレビと同じようにゲームの中で暴力が賞賛されるわけですが、テレビの中では他人の暴力が賞賛されるのに対して、テレビゲームの中では自分自身の暴力が賞賛されるわけです。相手を倒すと面白い映像が見られるとか、面白い音楽が聴けるとか、そういうご褒美が。だから、より影響が強いのではないかとという議論が従来からあります。それから、テレビゲームは実際に擬似環境で暴力を振りますので、暴力に慣れる。

たとえば、現実には怒りを感じるものがあってもいろいろな選択肢があるんですね。我慢することも逃げることも話し合うこともできるんですが、暴力に慣れているとそちらの選択をすることがしやすくなる。その結果、暴力的な行動に出やすいという議論

も昔からある。

最近、テレビゲームが進展してきて、本当にリアルにありそうな内容になってきているということがあるので、今は悪影響があるというふうにいっているんじゃないかと。昔はインベーダーゲームなんかのキャラクターが出てくるんですけど、今は人ですね。実際に、最近ではテレビゲームの悪影響を検出した研究が増えています。またグロテスクなシーンを見ることがよってのトラウマ、心の傷、あとで思い出して緊張して夜眠れなくなるとかそういう問題があります。小さなお子さんの場合、はつきり避けたほうがいいと思うのは、このトラウマですね。暴力シーンというのは暴力を教える教材という面もあるわけですから、大人の接し方次第で、単純に遠ざけるといえるのかなと思います。

〈続く〉

（お茶の水女子大学）

（講演 平成十八年一月二十六日）

「子どもの見る眼」から「子どもを見る眼」へ

恒川 直樹

一、大人の働きかけと子どもの受けとめ

本稿を執筆中、こんな報道に接しました。

「しかりの受け止めに差 大人の考え、子に伝わらず」
——大人の61%が、「悪いことをしたら近所の子どもでもしかる」としたのに、しかられていると感じている子どもは18%にとどまることが14日、文部科学省の調査で分かった。いじめられている時の大人の対応についても、子どもの認識と差があり、大人の考え、行動が子どもにもうまく伝わっていないことが浮き彫りになった。文科省は「大人は自分がしていると思っっている以上に積極

的に子どもに関与しないと、子どもは大人に気にかけてもらっているという実感を持ちにくい」としている——

(二〇〇六年二月十四日付 共同通信社配信)

この調査は、中央教育審議会の生涯学習分科会によるものです(註)。大人と子どものお互いの関係認識のずれという目に見えにくい何かが、万人に訴えやすい数値の差として表わされているところが面白くもあり、また危うくもあるように思います。「%」という数字に還元された大人と子どもの実感は、どのような個々の経験から生まれてきたのでしょうか。

この調査報告の趣旨はともかく、大人と子どもの思い

が重なったりずれたりといったことは、家庭や地域の子育てのみならず、保育においても本質的で奥の深い問題でしょう。この問題を考えるとき、子どもが身近にかかわる大人をどう見ているか、いわば「子どもの見る眼」が私たち大人のありようを映し出す鏡となることは日々実感されるところです。

私は二十歳の頃から十年弱の間、とある保育園の協力を得て、保育を観察させてもらいながら発達や保育の研究、つまり「子どもを見る」ことを続けてきました。研究のための「観察」というと、子どもたちから一定の距離をとってビデオカメラを回すような、いかにも研究者然とした姿が思い浮かぶかもしれません。けれども私は当初から（恩師の導きもあって）むしろ、子どもたちと直に接してその息づかいや存在感を生き生きと感じるなかから、研究すべき何かを掴み取りたいと考えていました。そのため、小さなメモ帳の他はほとんど身ひとつで保育の場に飛び込み、発達や保育の経験も知識もろくにもち合わせないままに、手探りで観察を始めたのでした

（園の皆さんがそのような私を受け入れてくださったことは、昨今の子どもを取り巻く厳しい社会状況を見るにつけ、本当に僥倖だったと思います）。

園の子どもたちに対しては、「なおちゃん」という愛称で紹介してもらいました。何度も通って一緒に遊んだり給食を食べたりしながら保育の一日を共にし、互になじんでいくうちに、「なおちゃん」のイメージが次第に子どもたちの間にできあがっていきます。その頃の私の姿を思い描くには、初めて観察実習に訪れる実習生や、体験学習の中高生の雰囲気と比較的近いと思います。子どもたちは、週に一日か二日、特に何を教えるためでもなく遊びに来るお兄ちゃん、というような認識だったでしょう。一方の私のほうでも、次第に一人ひとりの子どもの姿がある程度見えてくるようになりました。研究者の立場からはしばしば「ラポールが取れた」といわれるように、ようやく観察の準備が整ったわけです。けれどもそれから長い間、私の「観察」は、子どもや保育者の姿を「見ること」に向かおうとしながら

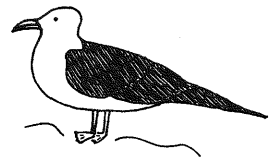
も、むしろ彼・彼女たちに「見られること」から学ぶことが多かったように思います。そんな当時の出来事から、ひとつ取り上げて紹介しましょう。

二・エピソード「なおちゃんもたまには……」

私が初めて園を訪れてから一年ほど経った十月、春から観察に入っていた四歳児（年中）クラスでの一コマです。給食の時間、担任の先生が用事でちよつと保育室を離れて大人が私一人になったときに、あるテーブルの男子三人程がおしゃべりで盛り上がっていました。食事の中の会話が楽しいのは何よりなのですが、口よりも身体全体で表現する彼らのおしゃべりには次第に熱がこもってきて、半ば立ち上がって箸を持った手を互いの顔に突き出すような、傍目にも危なっかしい状況になりました。他のテーブルで給食を食べていた私は見かねて、「ちよつと、お箸持ったままそんなことしたら危ないよ。それにごはん食べてるときに立つのはお行儀悪いよ」というように穏やかに声をかけて注意をしたのです

が、子どもたちは一瞬こちらを見て収まっても、すぐにまた元に戻ってしまっています。

しばらく後に少し声の調子を強めて注意してみても同じことが繰り返され、ついに私は思い切ってそれまで保



育園で出したことのない大声で、「やめなさい！ 危ないって言うてるやろ！」ときつく叱りました。その瞬間、叱られた子どもたちばかりかクラス全体がシーンと水を打ったように静まりかえって、目を見開いた驚きの眼差いで私を見つめます。予想以上に効き過ぎたお灸で張りつめた気まずい空気に、子どもたちだけでなく私のほうもどうしようかと戸惑っていると、私と同じテーブルに着いていた一人の女の子がその静寂を破ってひと言。

「なおちゃんもたまには良いこと言うなあ」。彼女はいいかにも感心したという風情で頷きながら、笑いを含んだ声でユーモラスに言いました。一瞬の間があつて徐々に子どもたちの間に笑いが広がるなかで、私は「『たまに

は「つてなによ〜」と彼女に笑って応じつつ、ほっと息をついたのでした。

三 「子どもの見る眼」と私のありよう

この出来事全体にはまずもって、当時子どもたちが私をどのように見ていたか、そしてその眼差しに映し出された当時の私のありようが示されています。私はどうふるまうべきだったのか、という実践上の問いも大切なのですが、限られた紙幅のなかでは議論の焦点を最後の女の子（以下「Aちゃん」とします）の発言に孕まれる意味に絞りたいと思います。

この芝居つ気たつぶりの言葉はその内容と発せられた声の調子、そしてその場の状況とがあいまって、明らかにからかいの雰囲気を感じていて、それまでの張りつめた緊張がある種のユーモアへと転化させました。身近な子どもに思わぬところで「一本とられた」経験は誰しも大なり小なり持ち合わせていると思いますが、一般にそうした出来事を大人と子どもの関係の側面から見してみる

と、関係が比較的親密で気安いこと、大人が子どもに対して不意に弱みを顕わにすることなどが含まれています。そうして日常の大人と子どもの非対等で不均衡な関係が逆転すること、それも大人がわざと負けてやるのではなく子どもの機知によって一瞬逆転させられるところに、このような出来事の面白みがあると思われまます。

ここで、Aちゃんの「たまには」という言い回しの含みについては、少し背景の説明が必要でしょう。私は保育室で特別な仕事は担わず、あえて言えば、子どもと遊んだり遊ばれたりするのが「仕事」でしたが、もちろん子どもと完全に同じではありません。時と場合に応じて、保育者の補助とはいかないまでも、一応の分別をもった大人としての役割を担うことはありました。具体的には、ちょっとしたケンカの仲裁や明らかに危険な行為を止めるといったことで、このエピソードもそうした場面のひとつです。

ただ、そうやって手を出すときの私はいくらか腰の引けたところがあつて、とりあえず対応してはみるもの

の、途中からは担任や近くの先生に引き継ぐのが常でした。これは私の立場や能力上の制約でもありませんでしたが、

それ以前に、一人の大人として子どもとしっかり向き合えていなかったことは否めません。おしゃべりしていた男の子たちは、私の「注意」を、学校のチャイムに諭えるならば（本鈴の前の）「予鈴」程度にしか受けとめていなかったといえるでしょう。「担任の先生に叱られるまでは大丈夫」というわけです。彼らに限らず、あるときは他の年長の女の子に「なおちゃんは注意はするけど、おこらへんもんなあ」とにこやかに評されたこともありました。それは裏を返せば、いざというとき頼りにならないということであって、ケンカの仲裁を頼みにきたときに担任の先生が近くにいななくて、「なおちゃんでもいいわ」と前置きしてから私に頼んできた子どももいました。ですから、私に大声で「おこられた」とき、子どもたちはただビックリしたのではなく、「いつもはおこらへんのに、今はなんで？」という疑問も浮かんでいたはずです。こうした事情を背景にしてみれば、「たまには

良いこと言うなあ」という言葉は、まさに私の痛いところを鋭く突くものでした。

さらに正直に言えば、私が意を決して（と同時にやはりいくらかは腹を立てて）大声を出したのは、「危険な行為を止めなければ」というまっすぐな気持ちだけからではありませんでした。実はこの出来事をその直後にとりあげた卒業論文では、「先生がいなくて怪我でもされては困るので」ついに大声を出して叱った、とあつげらかんと記されています。当時も幾分自嘲気味に書いた一文とはいえ、今あらためて読むと赤面するほどの無責任さです。少なくとも今の私には、Aちゃんの言葉はこの屈折した自分自身の態度を揶揄するようにも響いてきます。

四．「子どもを見る眼」へ

ここまで「子どもの見る眼」が映し出す私のありようをやや反省調で述べてきましたが、本当に大切なのは、それを鏡としてさらに「子どもを見る眼」へと向かって

問い返していくことだと思います。

このエピソードでのAちゃんのありようをひと言で表わせば、「おませ」だということになるでしょう。彼女は普段から、大人顔負けのことを言ったり、場を仕切ったりできる子どもでした。大人に親しみをみせ、なかなかの甘え上手でもあり、私にもよくなついてくれていて、このときも同じテーブルで一緒に給食を食べていました。ですからこの発言は、ある意味ではとてもAちゃんらしい言い回しで、私との気安い関係のなかでいつものおませっぷりが発揮された、と受けとめて済ませることもできます。

けれども、私が大声を出したとき、Aちゃんが平然とそれを受けとめたとは考えられません。まず大きな声というのは、予測していない限り（あるいは予測しているも）、心身に直接響く刺激として、半ば反射的に驚愕の反応を引き起こしますから、彼女もほかの子どもたちと同じように、一瞬ドキッとして身体が固まるような感覚を覚えたはずです。さらには、「いつものなおちゃん」

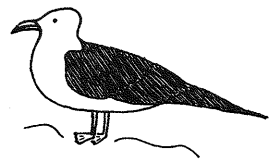
とは違う私の強張った声や表情など全体的な相貌に、まるで初めて出会った見知らぬ人のような違和感を感じたのではないでしょうか。おそらくここまでは、ほかの子どもたちもほぼ一様に経験したことで、大声に反応して一斉に私を見つめたとき、十数人の視線はさながら「!?」マークの大きなひとつの眼差しだったといえます。

とはいえ、やはりAちゃんの独自のふるまいは、この状況に彼女なりに対処しようとしたことの表れだと思えます。右に記したように、普段一緒に遊んでいる「いつものなおちゃん」に戻って欲しいという、幼い子どもとしての願いもあったでしょう。その一方で、まるで自分が年季の入った保育者でもあるかのように「なおちゃんもたまには……」と評してみせた彼女は、憧れる「大人」や「先生」の気分をいくらか味わっていたようにみえます。おそらく私が大声を出すまでの流れを気にとめていた彼女は、私の大声の理由を一瞬遅れてではあってもある程度理解できたでしょう。そして叱ってから宙ぶ

らりんになって私の妙な雰囲気もなにかしら感じていたかもしれません。もちろん私は、彼女が計算ずくの皮肉としてこの言葉を発したのだといたいわけではありません。むしろ、状況の理解、幼い子どもとしての不安な気持ち、ちよつと背伸びして大人ぶつた気分などが渾然一体となって生じてきたとき、聞き覚えていた大人のセリフがその身振りと共に自然と口をついて出た、と考えるほうがふさわしいのではないのでしょうか。

この「おませ」な言葉は、その場と私の姿を子どもなりの眼差しで描写すると同時にユーモアの力で揺り動かそうとするものでした。考えてみると「ませた」という形容には、子どもが成長することに対する肯定と否定が入り混じった、大人の相矛盾する思いや願いが籠もっています。正直なところ私自身はAちゃんのおませっぷりに窮地を「救われた」心持ちでしたが、彼女にしてみれば、逆に一喝されるかもしれない状況ではありません。自分は叱られた当事者でなく、いくら気安い「なおちゃん」相手とはいえ、大人がいつになく本気で叱った姿を

からかうようなことを言うのは、なかなか大胆な賭けだったと思います。とはいえ、彼女がやぶ蛇を覚悟の上で賭けに出たようにも思えません。むしろ、子ども自身も意識せずに遊びのような軽やかさで発せられたひと言に、その子なりの様々な思いや願いが凝縮されて籠もっていることの不思議さ、面白さ、そして大切さを、このエピソードからはあらためて感じます。



五・おわりに

思えば、初めて観察に訪れてから十年近くを経て、私もずいぶん大人らしくふるまうようになりました。子どもをかわいがるのも叱るのもそれなりに板に付いてきて、子どもたちからは「なおちゃん」よりも「なおちゃん先生」と呼ばれるほうが多くなっています（もちろん現場の先生方とは相応に違った存在ではありますが）。そうしてある程度の知識と経験を伴った「子どもを見る眼」を養っ

てきたことはまだまだ若輩ながらも私なりの成長かもしませんが、一方で「子どもの見る眼」に対する当初のナীবサは良くも悪くも失われてきているように感じます。

冒頭に引いた調査報告は「大人が自覚する以上に子どもへの働きかけが必要」と提言していました。子どもと大人の関係の希薄化が叫ばれる昨今、それは当然の主張であり、働きかけなくして共に生きる関係は成り立ちません。ただその一方で大人は現に自分が行っている子どもへの働きかけの意味を、本当に「自覚」できているのだろうかという疑問を、私自身も含めて感じずにはいられません。事実、私の大声も「危険な行為を厳しく叱った」という見かけの水面下には、及び腰で子どもたちとかわる私の態度を始めとして、様々な意味が渦巻いていました。それらは子どもと大人の関係において生まれ、またそこに還流するものです。「自覚」と「働きかけ」について大人が問うべきは単にその程度や量ではなく意味であり、これらは常に子どもという他者に対する

大人の「他覚」と「受けとめ」と対になっているはずですが、したがって、調査が示した「差」はあくまでも意味への問いの契機のひとつとして役立てるべきであって、答えではないでしょう。それを大人の内に回収してしまえば、「大人が自覚する以上の働きかけ」は独りよがりの押しつけと紙一重のところに陥ります。

とはいえ、子どもも大人も生きて変化し続ける存在である以上、「子どもの見る眼」と「子どもを見る眼」は、ずれたり重なったりを繰り返していくほかありません。それでもどこか重なり合う手心ある意味を求めて、むしろそのずれをも原動力にして日々子どもたちと向き合い、共に生きる意味を問い続ける面白さと難しさは、保育実践にもその研究にも、根底で通じるものではないかと思っています。(常磐会短期大学)

註 「地域の教育力に関する実態調査」報告(案) 平成十六年二月十四日 文部科学省ウェブサイト (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyov/chukyov2/siryou/003/06021701.htm)

ゆつくり星を見ませんか？

—七夕と星空—

田中 千尋

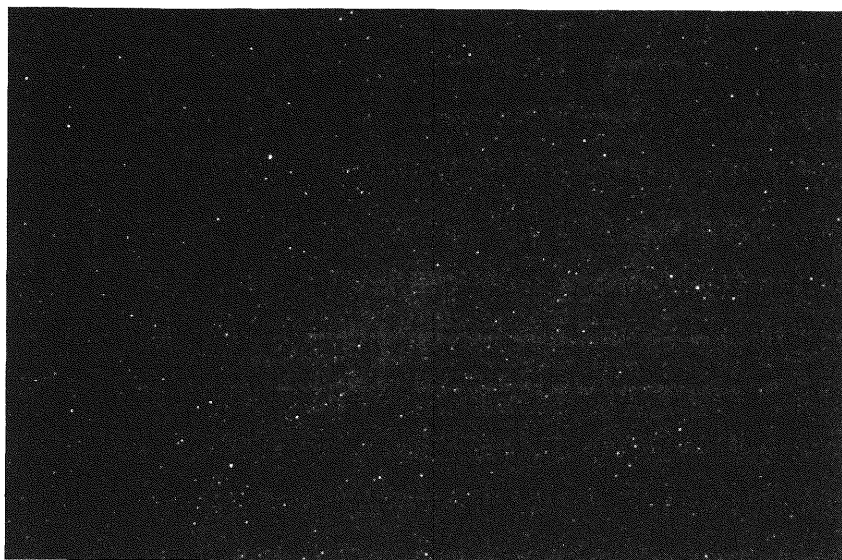
一、はじめに

子どもの頃、七夕の日に夜空を見上げて、無心に手を合わせて願い事を唱えたことがあるでしょう。七夕は日本版のスター・フェスティバル(星祭り)です。子どもたちにとっても、日常生活と宇宙の世界をつなぐ、最初の入口です。さあ、星についての正しい知識を身につけて、子どもたちと一緒に初夏の夜空を見上げてみましょう。

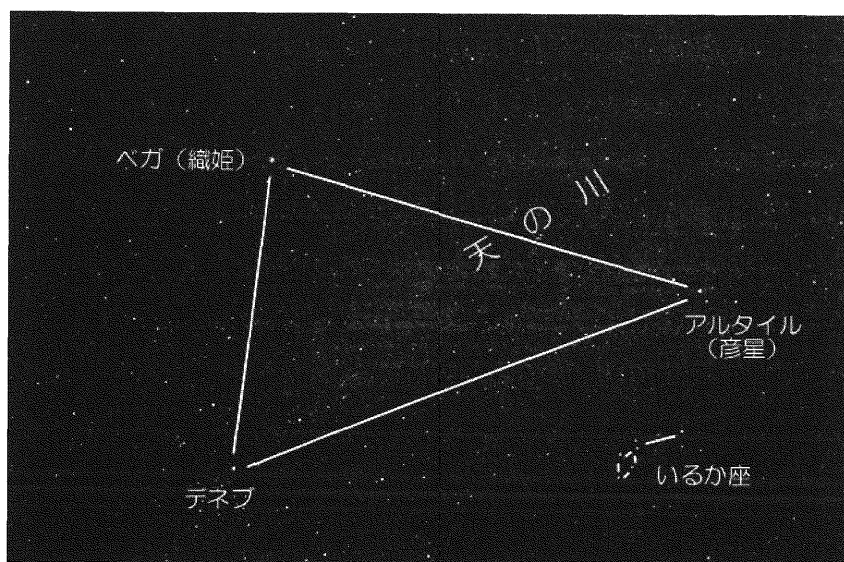
二、織姫と彦星

七夕の星空の主役は、言うまでもなく「織姫と彦星」です。星座の世界では、織姫はベガ、彦星はアルタイルと呼ばれています。

織姫(ベガ)は、すぐに見つけることができます。七夕の頃ですと、ちょうど天頂付近……つまり頭の真上の空に、白く明るく輝いている星が織姫です。惑星(金星



▲夏の大きな三角と天の川



▲解説図

や木星)を除けば、初夏の夜空で一番明るい星ですし、ほとんど頭上に見えますから、子どもでも探せます。ベガは、こと座の一等星です。こと座という星座は、ベガ以外に明るい星がありません。しかしよく見ると、ベガの右下にぶらさがるように、平行四辺形が見えます。双眼鏡やオペラグラスで見れば、都会でもこと座の全貌を見られるでしょう。

一方、彥星(アルタイル)は、ベガに比べると少し暗く、見つけにくいかも知れません。アルタイルは、わし座の一等星です。わし座もアルタイル以外に目立つ星がなく、また形もとりにくい星座です。しかし、織姫と彥星は都会の街灯り(これを光害といいます)の真ん中でも、確実に見ることのできる、明るい星なのです。

三、夏の大三角

「夏の大三角」という言葉は、小学校高学年の理科の授業で聞いたことがあると思います。織姫(ベガ)と彥星(アルタイル)に、デネブを加えたのが「夏の大三角」

です。デネブは白鳥座の一等星で、ちょうど白鳥の長い首の先端に輝いています。白鳥座は「北十字」とも呼ばれ、デネブを根元に大きな十字架の形をしているので、非常に形のとりやすい星座です。

「夏の大三角」の三つの星の関係は、アルタイルを頂点に、ベガとデネブを結んだ線を底辺にした、きれいな二等辺三角形を形づくっています。夏の夜空のほぼ頭上(天頂)に大きな二等辺三角形が見えたら、その頂点が彥星、底辺の左側が織姫です。

四、天の川を見たい

七夕といえば、もう一つ思い浮かぶ言葉は「天の川」でしょう。しかし、天の川を実際に肉眼で見たいことのある方はとても少ないと思います。天の川の正体は我々の住む太陽系が属している「銀河系」そのものの姿です。つまり、地球からはるか遠くの微弱な光の恒星の集まりです。英語ではミルキー・ウェイと呼ばれていますが、決して液体を流した「川」のようなものではありません。

天の川は、方位でいえば、南の射手座付近から夏の大三角を横切り、北のカシオペア座にかけて全天にたすきをかけたように懸かっています。とても淡い光芒なので、

本当に空の暗い場所でないとはできません。

もし初夏の晴れた晩、山間部や海岸の空の暗い場所で織姫と彦星を見つけたら、その間をよく見てください。

淡い光の帯が見えるはず。それが天の川です。



▲射手座付近の天の川

五、寝転がって見よう

織姫や彦星は空の高い場所、ほとんど天頂付近に見える星です。立った姿勢で見上げると、しばらくして首がいたくなります。もし、子どもたちと観望するチャンスがあつたら、持ち物の中に「敷物」を加えましょう。園庭や公園に敷物を敷いて、そこに寝転がって見上げてみ

てください。空が驚くほど広く、そして近く見えるものです。

六、星空はタイムマシン

夜空の星をゆっくり見ていると、「あの星はどのくらい遠くにあるんだろう」と思えてきます。答えは「はるか宇宙の果て」です。空の暗い高原などに行くと、星はまるで手に届きそうな場所に見えますが、実は人間が決して行き着くことのできない遠い果てにあるのです。

星座をつくる恒星までの距離は「光年」という単位を使って表現します。「光年」というと時間の単位のように聞こえますが、実は距離の単位です。一光年は光が一年間で進む距離と定義されています。光は一秒で約三千万キロメートル進みますから、一光年はざっと九兆五千億キロメートルというとても遠い距離になります。

その単位で計算すると、織姫は約二十五光年、彦星は約十八光年の距離にあります。それでも地球から見える星ではごく近い距離の星に属するのですからオドロキですね。

よく考えてみると、今地球から見えている織姫の光は二十五年前に織姫を出発したことになります。そういう意味で、星空はタイムマシンということになりますね。

「あの織姫の光はね、ちょうど先生が生まれた頃を見ているのよ」なんてセリフ、使えます。

七、七夕に天気が悪かったら？

伝説では織姫と彦星は、一年にたった一度、七夕の晩

にだけ会えることになっています。その伝説の印象が強いせいか、織姫や彦星は、実際の夜空でも七夕の晩にしか見えないと思っている方が多いようです。子どもたちから「七夕の日に曇ったら、織姫や彦星は見えないの？」という質問をよく耳にします。梅雨の明けていない地方では、そう思うのも無理はありませんね。

実はそうではありません。織姫や彦星は七夕の前後、いや、実は初夏から秋にかけて、かなりの長期間夜空に見えている星なのです。もし七夕の晩が曇りや雨でも、梅雨が明けた夏の晩、織姫も彦星もしっかり見えていますので、安心してくださいね。

私が北極圏ラップランドに設置した「オーロラ自動撮影カメラ」には、高緯度地方のため、ほぼ一年中織姫・彦星が写ります。生中継公開していますので、どうぞご覧ください（註）。

八、竹がなくてもできる七夕飾り

さて最後に、私が毎年実践している簡単な七夕の飾り



▲模造紙を利用した七夕飾り

を紹介しましょう。七夕の行事といえば、大抵の幼稚園・保育園では竹を注文して、飾りや短冊を吊すと思います。確かに夢のある楽しい活動ですが、準備や廃棄が大変で費用もかなりかかります。竹の枝で目に怪我をする事故も発生します。

私は毎年、模造紙一枚で楽しく七夕飾りを作っています。まず、模造紙にボスカや絵の具で竹（笹）の絵を描きます。次にスプレー糊を全面に塗布します。この時、換気に十分注意しましょう。その上に、子どもたちの作った短冊や飾りを貼っていくのです。立体的なものはテープで貼っても構いません。この方法だと、壁面や黒板の少ないスペースでできるし、活動後の記録には丸めて保存できます。時間やスペース、それに予算が厳しい時は、是非おためしくください。

（お茶の水女子大学附属小学校）

現代おもちゃと子ども世界の文法 その二

性差 / 仮想現実 / 感受性

マクシヤリテイ

ヴァーチャルリアリティ

センシティブテイ

森下みさ子

通信機能のついた育成型ゲームの流行

——たまごつちのような育てるおもちゃも、今子どもたちの間で人気です。新しいバージョンは通信機能がついていますか……。

森下 ポケモンのゲームでヒットして以来、通信機能は活用されていますね。

——携帯ゲームも相手がいて、かわりかかってくるようなタイプのものになってきていますね。

森下 ただ、通信機能も「基本には人とつながりた

い」という願望がなければ、持っていたって遊ばないと思います。

——新バージョンのたまごつちは、成長後、他のたまごつちと結婚させることができますよね。うちのF子と同級生たちは、みんな首からたまごつちをぶら下げ、放課後公園に集まって、同じ日ぐらいい、お見合いや結婚ができるように調節して、今週はだれと結婚させるかというのを電話で予約をしています。

森下 携帯ともつながっているしね。あと、パソコンでネットとつながると、ネットに親が現れるんです

ね。親は星に行っちゃったことになっているから、そういう擬似的世界がネット上に用意されています。

——うまく世話できずに、死なせちゃったたまごつちを供養することもできませんね。

森下 そうそう。お墓もあるから。以前のブームのときは、小さい子というよりは、女子高生ぐらいが熱狂したでしょう？ 子どもには至らなかつたですよ。

小さくてかわいいキャラクターはお守り

——今はどこへ行っても、子どもたちはたまごつちをぶら下げていますよね。

森下 こんな電子空間で育てて、生死を軽くみているという批判もあるけれど、本当の生身のペットと比較するのは違う気がします。例えばF子ちゃんみたいに、たまごつちを連れて歩くという感覚ね。どうして連れて歩くんでしょう？

——F子の場合、片時も離さず、枕元に置いて寝て、朝起きると「子どもがいると大変」とか言いながらお

世話していますね。たまごつちの生活時間も自分でセツトし直しています。学校に行っている間はお世話できないから無理やり寝かせたり、一日早くするとか遅くするとか時間を調節するのだけど、あまりそういうことをすると成長のスピードが変わっちゃうので、

「お母さん、昼間はお世話をお願い」と頼まれます。

森下 たまごつちはベッドとは違うところがあって、連れて歩くことによつて得られる安心感とか……、向こうが要求するのにこたえるという形で自分をかかわらせるところに、逆に居心地のよさみたいなものを感じているのかなと思います。一時期のブームのときは、物珍しさで大人も遊んだり、プレミアがついて高い値段で売れたりしたけれども、今手にしている子どもたちを見ていると、ポケモンゲームの延長みたいな、「いつも自分と一緒にいて、そして友だちと交流する」ときも窓口になってくれて、ある種、「安心感」というのもあるのかなと思います。「お守り」的な意味もあるんじゃないかなと思う。

——確かに。

森下 女子高生がよくカバンや携帯電話にキャラクターグッズをたくさんくっつけているでしょう。

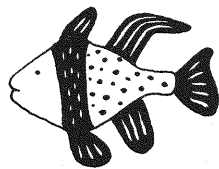
そういうのとも関係があつて、自

分の身近に「かわいいもの、小さいものをくっつけて歩く」現象は、よく目にしますよね。ポケモンも、ゲームそのもののおもしろさももちろんあるけれども、連れて歩けるというか、小さいかわいいものが相棒としてついてきて、その上で友達とバトルができるでしょう。その意味で、男の子と女の子の両方がポケモンに興味をもったのもわかります。たまごっちの場合、どっちかというとな女の子じゃないかな。

男女が共有できるおもちゃや遊び

——それでは、男女が共有できているようなおもちゃや遊びの代表はポケモンですか？

森下 そうですね。ポケモンは結構長く流行ってい



て、ゲームという点で男の子を、かわいさという点で女の子を夢中にさせ、男の子は強い相棒や武器を揃えて戦わせるのに対して女の子はかわいいものを揃える。女の子の場合、たとえ弱くても「私はこの子たち」みたいなのを決めていて、連れ歩く感じでゲームをしていたり、ポケモン関係のグッズはかわいいキャラクターが多いから、そういうのを買い求めたり。ポケモンは、「バトルとかわいいを両方ゲット」していいんじゃないでしょうか。

ただ、一応男女の違いを言うことはできるけれど、境界は少しずつ低くなってきている気はする。特に女の子のほうから男の子のほうへいくのは割と楽で、ゲームに関して言えば、女の子もどんどん垣根を乗り越えて遊べるようになっていて、むしろ男の子が女の子のほうにくるのには抵抗があるかもしれません。

——今、小学生はゲーム以外で何をして遊んでいるのかなと疑問に思うのですが、娘たちに聞くと、男の子も女の子も一緒になって、体を突いたり押ししたりしな

がら、ドッジボールや野球、S拳をしています。

森下 学校で見せる子どもものそういう表情と、うちで見せるのとは違うのかもしれないですね。学校は、ゲームを持ってきちゃだめとか、禁止したりもするでしょう。

——でも、うちの周りは、昔、林業試験場だった大きな公園や空き地があるので、みんなで自転車を乗り回し、池で水鉄砲で遊んだり、虫捕りしています。

森下 環境に恵まれて、幼児のころから子ども同士向き合いながら直接触れ合って遊ぶ経験をしていると、小学校に上がってからもそれが活かされてくると思うけれども。

「手を出さない・手を出せない」子ども

——自然環境に恵まれて、子どもが比較的多い地域だから、子ども同士集まりやすいという条件があると、意外と昔みたいに遊んでいるのでしょうか？

森下 そうだと思います。だから、単純に「子どもが

遊ばなくなつた」「遊べなくなつた」と危機感をあ

おつても仕様がなない。ただ、保育の現場なんかで時々聞くのは、本当に小さいときに、手を出さない、手を出せない子が増えてきたということです。何か物があると、子どもつて必ず手を出さずでしょう。インタビューをしても、子どもつて必ずマイクに手を出さず。この世界にまず触れるという形でかわらうとする。そういう確かめるような好奇心みたいなものが減っているというのは聞いたことがあります。

例えば、さつき友だちと遊ぶといつたときも、友だちとぶつかる、対面して遊ぶということであればいいけれども、そうじゃない。例えば画面を通してというふうに、対面じゃなくて並列して、それぞれに同じ方向を向いて同じ場にアクセスをして、そこから返ってきたものに反応している場合があります。

ウルトラマンごっこでも、ウルトラマンや怪獣になつて、うわーと戦っているのはいいとして、みんなそれぞれにウルトラマンのポーズをとっているけれ

ども、そこから先がない。かかわれるところがないんですね。みんな画面に対して鏡のように自分のポーズをとるけれども、友だちと、ごっこという形で場をつくるといいうのができなかったりするというのを聞きま
す。ごく幼いときに、とにかく触れると、向こうにも自分と同じ生身の相手がいるという感覚が養われてくると思うけれども、それがないと、自然環境がどんなに整っていても対面して場をつくるような遊びにはい
かないんじゃないでしょうか。

未来のおもちゃと子どもの遊び

——これから、子どもの遊びとかおもちゃは、どんなふうに変わっていくと思いますか。

森下 幼児期に関しては、新しいものを開発するとい
うよりは、スタンダードをきちんと押さえていく必要
があると思います。玩具業界も、ただ売るとい
うことじゃなくて、本当に人間社会に幼い人が人として加入し
ていくには何が大きかを、おもちゃの創り手として考え

て、親や保育者と協力していかないといけないですね。

その先で、あるきちつとしたベースができた上
なら、さつき言ったようにヴァーチャルな空間を活
かした遊びというのも一つの選択肢として考えてもいい
し、対面の関係ができた上なら、そういうヴァー
チャルな空間を通してコミュニケーションをとるとい
うことがあってもいいと思います。

昔だったら、本で読んだり、映画で見るとい
ったヴァーチャルな経験が、自分がインタラクティブに
かわれるようになったこと自体は、決して悪いこと
ではないし、これからは親子二世代でそういう空間を
介して遊ぶということも出てくると思います。例え
ば、ゲームを通して親子で遊ぶ、コミュニケーション
をとるといように……。

——最近、高齢者向きのゲーム機も開発されています。
森下 タッチパネル式のゲームなんかは、おばあちゃん
やおじいちゃんにも絶対に受けると思いますね。何
かそういうのを通して異世代が交流できる。逆にいう

と、子どもが何をしているのかわからない状態のほう
が怖いでしょう。場合によっては、お父さんが興味を
もっているゲームに子どもも興味をもってきて、二人
でやっていたりすれば、親は「おまえ、それはやり過
ぎだから、ここまでにしろ」とか、自分の反省を含め
てだけれども、何かしらセーブがかけられると思う。

——そうですね。今の子どもたちが、あと十年、二十
年すると、次の世代と一緒に遊ぶ場合、ゲームを介し
てということになっていくでしょう。

森下 知らないで批判するんじゃないかと、知ってほし
いというのはあります。ただ、もう一つは、「何かい
い形でゲーム世界を卒業させていく」というのもある
かなと思います。一緒に遊んでいけば卒業の時期もタ
イミングもわかる気がします。

ヴァーチャルと現実の混在

——ところで、テーマパークのなかでも、ディズニー
ランドは一つの子どもの文化として定着したように思

いますが……。

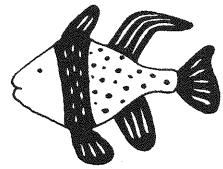
森下 ディズニーが非常に成功しているのは、親子二
世代とか、三世代、リピートする形で子どもを巻き込
んで、またその子どもが親になると、自分の子どもを
連れていくというふうには、世代間をうまくつないで
いったという要素がありますね。

——でも、我々世代、初めてディズニーに出会った世
代というのは、ああいうヴァーチャルな世界とは違う
世界があるということを知った上で楽しめていたわけ
じゃないですか。今の子どもたちって、下手をす
ると、あれがすべてになっていませんか？

森下 よく現実とヴァーチャルなものの区別がつか
なくなつて事件が起きるんじゃないかと批判されるけ
れども、さっき言ったように、基本の、触れて感じる
部分とか、この世界に自分がいるということは、子
どもが自分というものの人間世界での居場所をとらえ
られるように育ってくれば、言葉にはならないけれど
も、ヴァーチャルはヴァーチャルであると、子どもは

結構理解していると思います。

また、幼いときは理解していない場合があっても、やがては大丈夫になるというか……。例えば幼稚園で、一時期、「登園してくる



ときにピカチュウに会った」と言う子がいて……。

——よくわかります。混在していますよね。

森下 混在しているだけで、うそをついているわけではありません。「僕も会った」とか、「私も」とか言っていて、その話がすぐリアルで、まちのどこそどこで会ったよねとか、歩いていたとか、話をしたとか言うの。着ぐるみと会ったのかなと思って聞いていたら、そうじゃなくて、本当にピカチュウだと言う……。そういう實在感というのは、アニメや何かが与えるものとして、私たちもあつたというか、本当にいるというのとは違うけれども、いるかのように……。

——実体があるもののように感じているわけですよ。だって、F子は、たまごっちがふんをすると、気

配でわかるみたいで、最初のころは「何か臭い」とか言っていたから、最近のおもちゃは臭いも出すのかなと、こっちが信じていました。

森下 そういうふうに思い込むのは、別に危険ではないのね。

——そこまで世界を共有できているわけですよ。

森下 そうそう。そのときに、じゃあ、お世話をしなきゃと思うのは、別に悪いことじゃなくて、逆に健全に育っているということですね。自分もそうやってお世話してもらったという記憶がしっかりあるわけでしょう。臭いという感じ、ちゃんとトイレの世話をしなきゃと思うのは、自分がそういうことをしてもらってきたという記憶があるから、たまごっちに対してもしてあげなきゃと思っているんですね。今までだったらお人形に対してやっていたのが、たまごっちということだから、それは問題ないと思います。

むしろ、實在感がない、逆に、普通の人だったら、子どもでも遊びとして遊べる部分も、そこにしがみつ

かざるを得なくなっちゃうと怖いんですね。神戸の事件のときも、少年が「透明な僕」という言い方をしていたでしょう。あれも、透き通った、きれいなイメー
ジじゃなくて、「自分がいるという実在感がない」ということだと思います。だから、彼にとっては、ゲームも何も遊びではなくて、そこにすぎるしかないぐら
い……。

——存在が認められていないか、自分自身が自分を抹殺するしかなかった。

自分の存在感が希薄になる怖さ

森下 自分がいるという感覚がないから、どこかに居場所をつくるというときに、そこにあった身近な世界というのが、私たちからすれば虚構の世界だったわけでしょう。だから、人がどういふふう
に死ぬのか、人ってどこまで丈夫なのか確かめざるを得ない。そんなことを思うしか居場所がないということですね。現実と虚構があって混在するというよりは、「現実がな

い状態できちゃっている」ということですね。

——最近、F子が、割り箸の先を削って墨をつけて絵を描くために作っていたもので、ビー玉をはじいて遊んでいたら、手の平の真ん中にそれがグサツと突き刺さって、血がたくさん出たんです。表面の傷は小さいんだけど、結構奥深くまで入っていたので、それはもう痛い何のと大騒ぎで、お箸は持てない、鉛筆は持てない、給食は先生に食べさせてもらおうというような感じで、たった一日なんですけれども、この神経が麻痺して動かないとか、ここをけがしたのになあちが痛いとか言っていて、とにかく騒ぐ。

お風呂は入れないとか、着替えはできないとか、さんざん周りを心配させたあげく、「こんな小さなけがだって、やっぱり痛いんだよね」と言ったときに、そういう体験すらも最近の子どもはしていないことを改めて感じました。危ないことはさせないように安全管理に大人がすごく神経を使っているから、学校のほうでも、けがをさせてはいけないと神経を使っ

何かがあると、まず謝罪の電話がかかってくるような感じですか。だから、子どもが、「切ったら血が出る、痛いんだ」という思いをしていない。「相手も、そんな目にあつたら痛いんだ」という、相手の痛みを想像することもできないんだなど。

森下 それは、実際に触る体験があるかどうかですね。保育園で「手が出ない子」が増えたというのは、確かに「危ない、危ない」と言われてきたからでしょうね。少子化の影響で、親は、うちにいれば一人の子だけを見ているし、場合によっては、おじいちゃん、おばあちゃんがいても、みんなその子を見ているから、ちよつと手を出すと、危ないとか。汚いとか、服もグシャグシャに着るところから始まるのに、ちゃんと着せちゃうとか。そういう意味では、大事にしているようで、「子どもを物みたいにしている」のね。

「子どもの中にあるものが出てくるまで待つてあげる」ということは、信頼していきなとできない」でしょう。けがをしても、その子にとって意味がある、この

子ならその先へ行けるといふ信頼がないと、見守つていふというのはいけませんよ。

まず、お母さんが安心していきなと、お母さん自身が、この世界にいて大丈夫といふ気じゃないと、子どもに対して安全基地になれないのね。でも、安全基地ができていふと、子どもは興味をもつて手を出し、手を出した挙げ句にけがをしたりもするけれども、また帰つてきて、今度はまたさらに遠くへ行けるようになる。そういう安心感とか信頼感といふのが育つためには、親が安心していきなように、自信がもてるように、周りがしていきなといふけない、いい関係が生まれるように親も子どもも支えていく。そこに保育があるよな気がします。

（聖学院大学）

（了）

インタビュアー・平成十七年七月十六日

構成・首藤美香子（お茶の水女子大学）

カリフォルニア滞在記 (三)

—忘れ得ぬ人々　そして出来事—

岩立　京子

私はカリフォルニアで生まれて初めて「空」というものに出会いました。あまりにも壮大で美しい空に何度足を止め、何度感嘆のため息を漏らしたことでしよう。特に、日が昇る前後の空一面に広がる白いちぎれ雲が薄ピンク色の背景にうっすらと浮かび上がってきたかと思うと、背景があつという間に濃いピンク、そして黄色から

明るいブルーへと変化し、強烈なコントラストで浮かび上がってくる様は、言葉ではたとえようもないほど美しく神秘的でした。南部では洪水や山火事などの災害が起

きたりしていましたが、カリフォルニアの空はどこまでも悠然としているのです。また、

カリフォルニアでの日々の生活が落ち着いてくると、こちらで暮らす人々の生活が垣間見えてきました。サバティカル（研究休暇）で外国に住む場合、大学のキャンパス内かごく近くに住み、大学と自宅との間を往復する方が多いと思いますが、私の場合、バスや電車を乗り継いで二時間もかけて通学したため、ごく一般の市民の生活に触れることが多く、これも一つの収穫であったと思

います。バス停でバスを待つ間のおばさんとの学校談義、朝の電車の通勤ラッシュでひしめき合う人々、市電の改札口近くで寄付箱を前にチェロを弾く初老のストリートミュージシャン、「小銭を」と空の紙コップを差し出してくるホームレスの人、あふればかりの食材を入れたスーパーの袋を両手に堂々と母国語を話しながら帰路につくエネルギーシユな中国人、歩行器を押しながらゆつくりと歩く高齢者と介護の人、英語、広東語、スペイン語などが錯綜する道行く人々の会話……、私はこういった人々との出会いを通して、どの社会にも人々の日々の暮らしがあり、それぞれ一生懸命に生きていることをあらためて感慨深く感じました。

保育者の学び合いに参加して

渡米後二か月経った十月の終わりに、ミルズ大学で全米附属学校連盟 (NALS: National Association of Laboratory School) の地区大会がありました。担当者「私も出られるか?」と尋ねたら、「これは大きな組織

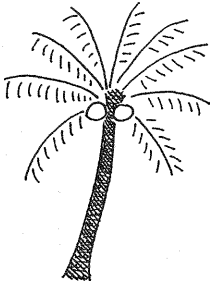
の会議で会員でないと言われませんでした。

「あなたは出られない」と言われただけなのにながっかりしてしまい、黙って引き下がる自分が後でとても情けなく思えました。「今、会員になることはできるか?」とか「何とか出られる方法はないか?」と食い下がればよかったと後悔し、その後、ミルズの特別研究員であるキャサリン・ルイスに相談すると「それは是非出るべきよ、出られると思うよ」と言われ、担当者に許可をもらえるように動いてくれました。こういった経験を重ねながら、私は徐々に自分の意思を言葉ではつきりと表示することの意義を理解していきました。

NALSは、公・私立を問わず百以上の大学附属のプレスクール、小学校、中学校が団体として加入している他、二百五十人を超える個人会員をもつ組織です。NALSの目的は、①教育改革において附属学校の貢献を高める ②附属間のよりよいコミュニケーションを図る ③附属が直面する問題の解決を促進する ④附属学校プログラムの改革に貢献する活動を組織する ⑤附属学校

連盟の地区レベル、州レベルでのネットワークを開発する
⑥ 優れた教育サービスのプログラムを会員に提供する
⑦ 出版・メディア関連のサービスを会員に提供するという七つで、一年に二度の会議をもち交流していきま

す。
平成十七年度の地区大会はミルズで行われ、テーマは「スチューデント・ティーチャーのメンタリング」と私たちの実践を洗練させること」というものでした。カナダやアメリカ各地から五つの大学が参加し、それぞれの大学が行っているメンタリングの目的、プロセス、評価などについてメンターする側の立場から事例が報告され、メンタリングを行うことでメンター教員自身が何を学べるか、メンタリングによって新たに生じてきた疑問などについてディスカッションが行われました。
発表者はすべて附属学校の先生で大学との連携による研究を進めていると



ころが多く、みな研究の構造を明確に示したり、理論的枠組みや参考文献を紹介したりして、かなり活発な議論が展開されました。

私はメンタリングという考え方のものが新鮮で必死でメモを取り、全ての内容を理解したいと注意集中して聞いていましたが、話し手によっては発音が聞き取りにくく五割程度しか聞き取れないことがありました。休み時間に、ミルズのヘッドティーチャーのクリスティンから「あなた、聞いていてわかる？」と聞かれたので「時々聞き取れず、理解できないことがある」と応えたら、その後、何人もから「あなた、英語がわかるの？」「私たちの言っていることがわかってるの？」と質問されました。アメリカに長く滞在する知人から、こちらでは「わからないときはわかるように積極的に質問したり、わかる範囲で議論に参加しなければならぬ。わからないことをそのまま放置するということは聞き手としての責任放棄と解釈される」と聞いていましたが、それを実感したのはこのときでした。一日中、神経を集中させて聞いて

いたので、全員の発表が終わるころには頭がくらくらするほど疲れてしまいました。雑談をしても人々が日本語で話す内容が自然に耳に入ってくるように、英語も聞き取れればどんなにいいのと思いました。

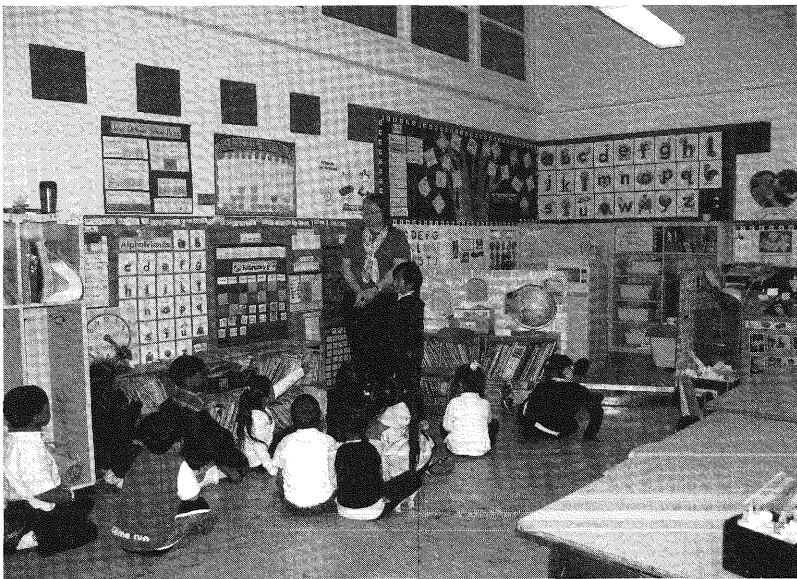
ジヨセ・オルティガ小学校のこと

娘が通うジヨセ・オルティガ小学校は、児童数二百数十名の小規模な学校です。英語と広東語とのバイリンガルプログラムを推進し、中国の文化的行事などが組み入れ、広東語を母国語とする児童には特別プログラムが展開されていました。娘のクラスは四年生の「ルーム203」で担任はワシントン先生でした。ワシントン先生と教頭先生は、入学当初から、周囲の友だちに馴染めるか、勉強は理解できているかなどについて細かく配慮してくださり、娘の隣の席には明るく面倒見がよさそうな子を配置し、リーディングについては各ストーリーごとCDを貸してくれたりしました。また、定期的に行われる子どもの表彰式では、英語のシャワーのなかでほとん

ど理解できずに過ごしている娘を「フレンドシップ」に貢献したとして表彰してくださいました。娘は算数や体育の一部を除いていつも自己發揮したいのにできない思いを抱いていただけに、表彰はとても嬉しくまた誇らしかったようです。表彰というのはいわゆる「アメとムチ」のアメにあたるものですが、何らかの形で一人ひとりの良さが認められ、ほめてもらうことによって子どもたちは自分に誇りをもてるようになると思えました。また、ハロウィーン・パレードやクリスマス・パーティーが全校で催され、先生も含めてほとんどの子どもが仮装を楽しんだり、歌やダンスを披露して親子共々楽しく過ごしました。アメリカの学校は個人主義に満ち、全体の行事は少なく、教室は競争的で、典型的にはアメやムチ、タイムアウトなどを駆使し、行動主義の原理で教育が行われているという先入観を私はもっていましたが、ケアリング・コミュニケーションをスローガンとして掲げている娘の学校に関しては、知的な学習や競争、個人の達成だけでなく、協力や思いやりが重視されているようでした。

ジヨセ・オルティガのキンダークラスを観察しました。遊び中心の総合的な活動ではなく、教科を中心として活動が組み立てられていましたが、幼児教育と小学校教育をつなぐかのように、絵本や歌、遊びなどを取り入れながらうまく教科の学びへと導いていく先生の力に感じました。私が二十八年前にデイヴィス市で見たキンダークラスとは全く異なっており、これが時代の差なのか、学校コミュニティの風土の差なのか、教師の個人差によるものかはわかりませんが、私が渡米前に抱いていた小学校のキンダークラスのイメージとは大きく違っていました。

アメリカに来てからしばらくは、「アメリカはくだけれど、日本はくだ」とあらゆることに対し一般化して比較しがちでしたが、しばらくすると「アメリカは」という言葉を使えなくなりました。そこには、多様な人種、多様な価値観と行動様式、多様な教育実践があり、典型というものを見いだすのが難しいことを知りました。身体で感じたこの「多様性」は、アメリカでの最も大きな



▲キンダークラス

私の学びであったかもしれせん。

十二月に担任による保護者の個人面談がありました。

個人面談はどのようなものだろうと楽しみに行ってみると、担任がサンフランシスコ教育委員会指定のスチュウデント・プログレス・レポート用紙を指し示しながら「アヤカはリーディングは難しいが、スペリングテストでは大きく進歩した。英語を通して理解するのはまだ難しいけれど、いつも一生懸命にやるがんばりやさん。日本だったらさぞかし勤勉な子どもでしょう」などと、学習の様子や意欲、態度などについて大変丁寧に説明してくれました。その用紙は評定の他に担任のコメントがびっしりと書き込まれた大変興味深いものでした。説明終了後に、説明を受けたことを証明するサインを求められ、こちらでは説明責任をしっかりと果たすことが教師に求められていると思いました。私は日本で雑談のような個人面談の内容に物足りなさを覚えたことを思い出し、ジョセ・オルティガで経験した個人面談がとても新鮮に思えました。

娘が二月末に日本に帰国することをワシントン先生がクラスのみんなに伝えると、多くの子どもがため息をついてがっかりしたそうです。ワシントン先生の発案で子どもたちが書いてくれたお別れのカードには心のこもったメッセージや絵がたくさん描かれていました。子どもたち一人ひとりの特性はもとより、ワシントン先生の人柄や子どもたちとのかかわりがすばらしく、娘がこのクラスで学べてよかったですと心から思いました。

公立学校の統廃合

ジョセ・オルティガ小学校は、サンフランシスコの他の学校と同じく、統廃合の対象とされてきました。校長先生をはじめとして教員、保護者は何度もミーティングをもち、存続に向けて運動を展開していました。サンフランシスコ市の教育委員会は生徒数の減少で、現在の全ての学校の運営は今後厳しくなるとし、公立校の大きな再編を試みようとしていました。サンフランシスコ市では毎年千人のペースで生徒数が減少しており、今後五年

はこの状況が続く見込みであることを、今回の再編で目標額の約半分、二百四十万ドルの予算削減が見込めると報道しました。各学校は存続に向けて闘いましたが、一月十九日の教育委員会の投票で、二十九校のうち三校を閉鎖、四校を再編、五校の場所を移動、二校はチャータースクール(オールタナティブスクール)へ変更とし、残る十五校の存続が決められました。閉鎖が決まったある学校では、親が子どもに登校を拒否させたりして激しい抗議行動を行ったことが新聞で大きく報じられました。閉鎖リストに入っていたジョセ・オルティガも、学校で何度もPTAの会議をしたり、教育プログラムのすばらしさをアピールしたり、保護者が統合反対の投書を地区の行政官に送ったりしていました。結果的に一年間の期限で存続できることになり、全校朝礼でそれが報告されたとき、先生も児童も「ピクトリー！」と握り拳を高くかざし、歓声をあげる姿が見られました。行政改革や少子化、子どもの地域偏在などの波はここにも容赦なく押し寄せ、生き残りをかけていろいろな改革が行われていました。

子どものために何かをする

娘は現地校と同時に、毎週土曜日、日本語補習校に通いましたが、そこで、母親がサンフランシスコ交響楽団のバイオリニストである友達ができました。こちらでの生活に不慣れな私たちにご夫婦でいろいろと助言してくださったことをきっかけにして、毎年、開催される「Deck the Hall」という子どものためのクリスマスコンサートに招待していただきました。Deck the Hallというのは、有名なクリスマススの歌の歌詞から取ったものです。

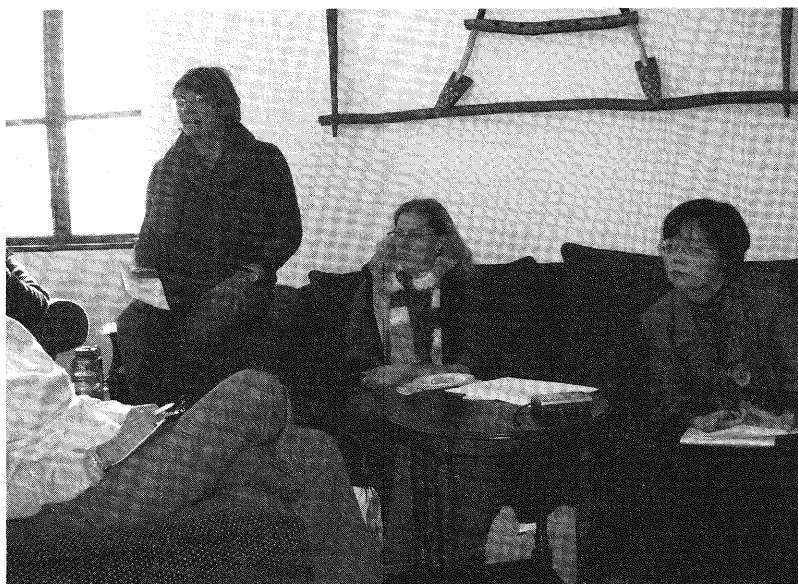
コンサートの当日、会場はきれいなドレスやスーツでめかし込んだ子どもと親であふれんばかりでした。こちらの人はパーティーとなると大層おしゃれをして楽しむと聞いていましたが、ペチコートでふんわりとなびくロングドレスの女兒やスーツに真っ赤な蝶ネクタイを決めた男児がちよつとすましてホールにいました。

会場には各々個性的で、ロビーの天井に届くほどの大きなクリスマスツリーがいくつも飾られ、それらはみんな

な様々な団体から寄付されたものでした。

コンサートが始まる前に、様々なイベントが企画されていきました。子どもが楽しめるようにクリスマスカードの手作りコーナー、パスタネットレスのコーナー、絵本を無料で配るコーナーなどのお楽しみコーナーや、各企業からのドネーションのドリンクやキャンディー、ドーナツなどが提供されました。

コンサートは、サンフランシスコ交響楽団によるクリスマスメドレーで始まり、子どもも出演する劇、そして優雅なサンフランシスコバレエとチビツ子バレリーナの踊り、そして最後には、クリスマスソングの大合唱と盛りだくさんのプログラムでした。すべてがすばらしく、また楽しく、これらが多くの企業、団体からの寄付によって行われていることに驚きを覚えました。この国は寄付を積極的に募り、大胆に資源を集め、不可能を可能にしていく国なのかもしれないと思いました。私は子どものために何かをするということは、正にこういうことなのかと勇気をもったような気がしました。



▲ランチタイムセミナー

それぞれのサバティカル

サバティカルの初期には生活その他の新たなシステム、人間関係のなかで適応しようと夢中で過ごしましたが、中頃からは保育に関する学びに直接つながる経験の連続でした。ミルズのチルドレンズスクールの先生や院生、教員とともに日本の保育ビデオを見ながら八回に渡って語り合ったランチャタイムセミナー、「理論と実践」という大学院の授業やイブニング・スピーキング・イベントでの発表と鼎談、そしてそのかたわら、UCバークレイ、スタンフォード、公立学校のキンダークラスなどの観察の機会を得ました。それぞれ特色ある保育・教育を行っていて、自信をもって保育・教育を語り、積極的に問いを発してくる保育者の姿は印象的でした。

サバティカルの使い方はそれぞれ異なり、研究者と交流しながら研究をデザインする人、計画に基づいてデータをしっかりと取る人、実際の学校や機関の視察を中心に実態を調査してくる人、ゆっくりと書物を読んだり執

筆をする人などがいるのでしょう。私は実際の保育・教育現場をこの目で見たい、外国の教員養成システムの現状について知りたい、そして、それを通して保育・教育に関する自らの考えを問い直したいという強い思いがありました。ミルズを中心にいろいろな保育者、研究者と出会い、保育事例をもとに話し合うことを通して、これまで当たり前だと思ってきたことを根底から揺さぶられるような質問を受けたり、大変興味深い考え方に合ったり、考え方や方法を比較することによって日本のそれらの意義を再確認できたように思います。

多くの人々と出会い、語り合えたこと、そして、今後の継続的なかわりにつながる関係を構築できたことは、私にとって大きな収穫でした。私や私の家族がアメリカで出会った全ての人々、かわりに感謝しつつ、滞在記の筆を置きたいと思います。

(東京学芸大学)

☆この連載を終わります。

新たな出発の年を振り返って

松永 聖子

いずみナーサリーは、平成十七年度四月より、お茶の水女子大学の附属学校園の一つとして、園舎、名称とも改めて再出発をしました。生後六か月から三歳未満児を対象とし、定員八、十名の異年齢混合のクラスです。

一．新しい園舎で

新しい園舎に引っ越して、一年が経ちました。名称も「いずみ保育所」から「いずみナーサリー」に変更し、電話の応対などで当初感じていた戸惑いも、今ではすっかりなくなりました。

この園舎は、大学と隣接する職員寮の管理人室、集会

室を改築したものです。改築の際には、洗面台の高さや、窓の開閉の形式、これまで使っていた家具や什器を使ったレイアウト、子どもの動線を考えた各部屋の使い方など、保育の環境としての建物について改めて考える機会となりました。

たとえば、洗面台の高さについては、附属幼稚園の三歳児の保育室の洗面台、トイレの洗面台の高さを測らせていただき、参考にしました。高さとともに奥行き、蛇口の高さも大切な要素であることに気がきました。

また、集会室の窓は、もともとは一枚のガラスを回転させて隙間をつくることで開閉するものでした。これ

は、指を挟む危険性があり、また、網戸をつけることができないため、上下の引き戸に作り直してもらい、網戸も設置しました。換気のためだけなら、窓は締め切りにし換気扇で対応することもできたのですが、保育の中で外からの風や光、音を直接感ずることで気分転換ができ、おおらかな雰囲気になかせないものであると考えました。

玄関やトイレ、和室などはほとんど個人のお宅の雰囲気を残したものになりました。一日九時間近くの長い時間をナーサリーで過ごす子どもたちにとって大切な、家庭的な雰囲気象徴されているようで、私は気に入っています。引越し当初、登園時に出迎えた職員に「○○さんの、おうち？」と不思議そうにしていた、「おじゃまします」と登園してきた、などのエピソードがかわいらしく、忘れられません。

二．みんなで集う食卓のために

零歳児から二歳児まで、そして保育士も集う昼食の時



▲風・光・音を直接感じられるのを願って

間。家庭では、いろいろな年齢の家族が一つのテーブルに集うことは自然なことなのに、保育の場でそれを実現しようとすると、なぜか多少の工夫が必要でした。

幼稚園の一室を改装しての「いずみ保育所」時代には、高めのテーブルと、附属幼稚園から借りた三〜五歳児用の椅子、テーブルのついたベビーチェアがあり、これらを組み合わせて昼食をとっていました。

哺乳瓶でのミルクの時期は、保育士のおひざや抱っこです。離乳食が始まると、テーブルつきのベビーチェアに座るのですが、これはテーブルがひじの部分でつながっており、座る部分ともベルトで固定できるので、おすわりがまだ危なっかしい時期からひとりで座ることができます。離乳食の時期は、だいたいこの椅子を使います。ここから、幼児用の椅子へのステップの幅が大きいです。ここから、ベビーチェアは二つしかないので、この椅子が必要な人が出てきたら、これまで使っていた人は幼児用の椅子に移ってもらっていました。一歳半ころの子どもにとっては、高さもひじがないことも少し注意が必要

でしたが、しっかり椅子を引くようにしたり、保育士が隣に座るようにしたりしました。このようにして、一つのテーブルを囲んで、昼食はとてにぎやかに、そしてなぜかおやつはとても静かでした。「ほり、ほり、ほり……」と、おせんべいをかじる音がよく響いているのがおかしかったです。

引越しを機に、幼稚園の椅子を返し、新たに一、二歳児用の椅子と低いテーブルを購入しました。椅子に関しては、一歳から三歳向けに約二センチメートル刻みに四段階あるので迷ってしまい、メーカーの方に相談しました。その中で、教室用の机・椅子などの学校用家具にはJISという規格があり、乳幼児用のものもこの規格に基づいて設計されていること、足の裏を床につけた状態でのひざの角度で椅子の高さの適正さを見ることができ、知りませんでした。

その上で、二種類の高さの椅子を選び、これで、ベビーチェア以降、それぞれの子どもの成長にあった椅子に座れると思っていたのですが、昼食のセッティングを

してみても、あることに気付きました。

様々な椅子の高さと、テーブルの高さとのバランスです。これまでの三〜五歳児用の椅子でちょうど良かったテーブルは、一、二歳児用の椅子には高すぎました。あらたに購入した低いテーブルは、一歳児にはちょうど良いのですが、二歳児はひざがつかえて座ることができませんでした。高さの違うテーブルを集めて食卓にするのも不自然でした。

そこで、さらにメーカーの方々と二か月間ほど意見を交換し合い、二つの試みをしました。まず、高いテーブルの脚を、二種類のうちの低いほうの椅子の高さに合わせて切ることにしました。さらに、高いほうの椅子に、取り外し可能な足をのせる台を作っていました。これらを組み合わせてベビークチェアの零歳児から、座高の低い低月齢児、大きくなった二歳児までが、それぞれに合った椅子に座って一つの食卓に集えるようになりました。

これらの工夫をしたことで、一、二歳児は自分で椅子



▲一つの食卓に集っての食卓

に上手に座ることができたり、上半身のふらつきが減ったりし、食卓を囲む雰囲気がスムーズで、にぎやかながら落ち着いた面も増えてきました。作っていただいた足の台は、みんなが使いたいと取り合いになるのでは……、または使わないと言い出すのでは……と少し心配したのですが、子どもたちは、それが誰になぜ必要なのかすぐに理解してくれたようでした。

毎年夏を過ぎると、子どもたちがぐんと成長したように感じられますが、実際、一歳児も背が伸びて、台は必要なくなりました。「もう、これいらなくなつたね」と保育士同士話しながら、子どもの成長の早さに驚き、また、それがとてもうれしく感じられました。次は、誰がベビーカーを卒業し、この台を使つて食卓につくのか、楽しみます。

三、大学の一施設として

ナーサリーは大学の一施設となり、大学のホームページや学内誌で紹介していただく機会が増えました。ま

た、マスコミの取材も多くあり、大学附属の保育所として知名度も高くなつたのでしょうか。学内で開かれるシンポジウムや学会の主催団体から、保育をしてほしい、保育できる場所を貸してほしいなどの依頼がくるようになりしました。「学ぶ意欲のあるすべての女性に門を開き、すべての女性に学ぶことの喜びと、知的に生きることのすばらしさを体験してほしい」という、お茶の水女子大学の願いを受けて、ナーサリーもその一翼を担いたいと考えました。

そこで、大学の施設を学外の団体に貸し出すことについて、大学の資産管理をする部署に問い合わせました。同時に、在園児の保育との兼ね合い、保育士の勤務に関すること、安全管理や責任の所在などについても検討しました。その上で、ナーサリーがもっている、乳幼児の保育に適した建物や玩具などの有形の資源、一時預かり保育の仕方や保育の際の人員配置のノウハウなどの無形の資源を駆使してできることは、どのようなことか考えていきました。

まず、在園児の生活を保障することが第一なので、通常の保育を行っている日は受けることができないと判断しました。また、保育士の労働条件の確保や責任の所在の面から、ナーサリーの保育士は保育を行わないことになりました。その上で、できることは大きく三つにまとめられました。

一つ目は、施設の管理です。ナーサリーの職員が施設管理責任者として出勤することにしました。施設の使い方や備品の出し入れに関するなどを保育のスタッフと共にを行うことにしました。

二つ目は、月齢や年齢による預かり方のコーディネーター、保育スタッフの配置の仕方について主催者にアドバイスすることです。たとえば、二歳児までは午睡が必要ですが、初めて場所や人に囲まれて午睡することは困難です。午睡はおうちの方とできるように、二歳児までは午前中のみ保育としたほうが良いということ、併せて小さい子どものいる参加者が参加しやすいよう主催者側にも配慮していただくように伝えました。また、保育

スタッフに関しては、多くの学会では学生さんがボランティアでしているとのことでしたので、学生さんであることに配慮して、子どもの数に対して手厚い配置をすること、半日ずつのローテーションを組むほうがよいことなどを提案しました。また、社会福祉協議会のボランティア保険への加入が望ましいのではないかともしました。

三つ目は、大学の児童学科・発達臨床学講座の同窓会の協力を得て、ボランティアの保育スタッフの紹介をすることです。保育スタッフを手配する手段をもたない主催者の方の役に立てると考えました。卒業生には保育の経験者も多く、信頼できるスタッフを紹介できました。今後も、大学の中で活かされる施設を目指していきたいと考えています。先日、見学にいらした先生方が、「今、もっているものを使って、なんでもできるわよ」とおっしゃっていたことが、本当にそのとおりだと、恵まれた環境に感謝する気持ちになりました。

(お茶の水女子大学附属いずみナーサリー)

編集後記

安部先生の耳に口を寄せ、小さな声で話した歩さんの「笑っていても悲しいことがある」の言葉に、津守先生の「天国からの種」の芽生えだと感じました。

そして四年前、TTをしていた小学校の一年二組での出来事を思い出しました。泣いていたDさんに声を掛けようとした私の手を引いて教室の外に連れ出し、「もつと悲しくなるでしょ、なんにも聞いちやだめ」とそつと話してくれたのはHさん。入学して数日後のことでした。

同じクラスの冬。足を骨折して欠席が続き、皆に忘れられているから、けがをした姿がはずかしいからと学

校へ来られなくなったMさんへのお見舞いの言葉です。「わたしのことみんなすれちゃったなんていわないですよ！ みんなどこころがつながっているでしょ！」「おうえんしているよ」「みんなでいいゲームをかんがえてたのしんであそぼう」「はずかしいならタオルをからだにぐるぐるまいてきてよ」「だれもわすれてないよ、だいじなともだちだから」……。

担任の先生と一緒に一人ひとりの言葉をかみしめました。

雲の向こうでいつも輝いている星が「天国からの種」と重なります。心の曇りが種の成長の妨げにならないように、星が見えない夜、そんなことも思いながら空を見上げました。

*本誌へのご感想や投稿希望などは
youjinmai@yahoo.co.jpまで。(河合)

幼児の教育

第一〇五巻・第七号

(二〇〇六年七月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十八年七月一日

編集兼発行人 浜口順子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8600 東京都文京区大塚二二一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五二二一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一一四一九

〒〇三十五三九五―六六一三(営業)

〒〇三十五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇―一一一九六四〇

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

食を育む

食育実践ガイドブック

総監修 師岡章
著 倉田新・徳永恭子・
野村明洋

「食育」という言葉を、
「食を育む」(子どもの生活の中に存在するもの)と
捉えることを前提とし、
食育に関する実践方法・事例を、
イラストや写真を豊富に用いて、
具体的に楽しく紹介します。



26×21cm/160頁
定価2,100円(税込)

【目次から】

- 子どもがかがやく食育実践の進め方
- 食育のすすめ方と実施時期のめやす
- 食育実践方法の選び方
- PART1 農で食を育む
- PART2 料理で食を育む
- PART3 環境構成で食を育む
- PART4 遊びで食を育む
- 保護者・地域に向けての働きかけアイデア
- 資料(保育所における食を通じた子どもの健全育成
(いわゆる「食育」)に関する取組の推進について/
楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～/食育基本法)

キナーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

名のない遊び

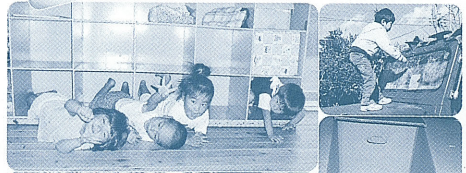
塩川寿平 著

一般に、遊びを語るときには遊びに名前(ままごとなど)をつけて呼ぶ。しかし、乳幼児の発達過程で見られる遊びを観察していると、文字や言葉で簡単に言い表せない行為や行動、つまり「名のない遊び」が意外と多いことに気づく。本書では、具体的な事例をもとに、乳幼児期における「名のない遊び」の重要性について語る。

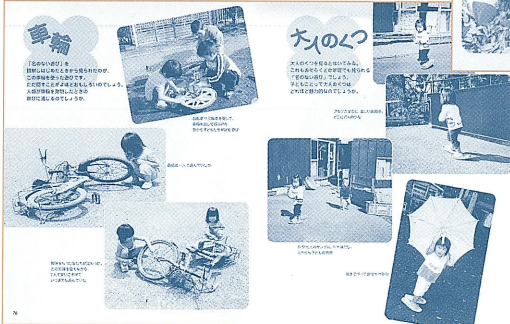


名のない遊び

塩川寿平・著



フレーベル館



26×21cm
96頁
定価2,100円
(税込)

目次から

第1章 「名のない遊び」とは

「名のない遊び」とは何でしょうか／「名のない遊び」はなぜ重要なのでしょう
「名のない遊び」とカリキュラム／「名のない遊び」と幼稚園教育要領・保育所保育指針

第2章 カメラがとらえた「名のない遊び」

水と／友だちと／入る／食べるのも遊び／落ち葉と／どろんこ／棒で／走る／寝る
重ねる／ここが好き／ミミズ ほか

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五二四円) ☆